明治二十九年十一月五日發行

女鑑



東京國光社

女鑑第百二十號

目録

毛利豊前守勝永の妻



女子の學事

こゝに女子の學事と題して、諸孃につげまゐらせむとするは、女子の學ぶべく脩むべき道々の本末、次第などを語らむとするなり。やがて、高く美はしき日本の、高く美はしき女子とならむに、學ぶべく修むべき道々を、品定めしていはむとするなり。

まづ第一には、道德倫理の道なり。誠に君を尊み、國を思ひ、父母にはよく孝情を盡くし、夫にはまめやかに貞節を盡くし、我子には正しく撫育の道を盡くし、兄弟にはやさしく友愛の情を盡くし、朋友にはよく信義を守り、上を敬ひ、下をあはれみ、斯くして、誠に高く美しき子となり、妻となり、母と成り、兄弟と成り、朋友となり、而して、高く美はしき臣民と成り、誠に高く美はしからむ日本女子となるべき心の掟を學びも修めも勵むべきはもとより大切の事なり。

次には、裁縫の道なり。これは、やさしきやまとの國の女子の美はしきたしなみにて、この道知らざるばかりの女子は、其の父母を勞はり、夫に仕へ、子を愛づる心さへに、いかならむと思ひあやぶまれて、いとおぼつかなくればゆるにこそ。また、女子は、實に一家の内を治め行ふべき婦となり、やがて、一家庭を守りゆくべき母となるものなり。されば、うるはしく家を治めゆくべき掟、やさしく愛兒を導き育てゆく道すぢは、もとより學び修めざるべからず。小家ばかりのものを建て、草木ばかりのもの育つるにすら、その道その掟知らでは叶はぬを。まして容易ならぬ一家、大切なる家庭を、治めも守りも爲しゆくなれば、その道、その掟を學び修むることせでは、何か叶ふべき。

その他、習字に、讀書に、作文に、算術に、歴史に、地理に、今の世に所謂普通學と稱するものは、もとより一わたり學び知らざるべからず。それ知らでは、今の世の普通の人たらむ智識を缺きたる人にて、人なみに世に立ち世をわたることと叶はぬ不具者ともいふべく、また單に世をわたらむたよりよりいふも、さらむ女

子は、不便なる事多からむ。

上に述べ來れるものは、いづれの道も、皆、このやまとの國の女子たる者の缺くべからざる道々にして、必ず踏みならふべく、必ず學び修むべき事どもなれば、女子の學ぶべき道が中の本ともいふべきものなり。これ等の道を知らでは、世の人なみの女子にはあらず、劣りも缺けもしたるものなり。女子に極めて直接の關係をもてる事どもなり。

さて、其の外には、文學、繪畫、音樂、生花、茶の湯、造花などいふ技藝あり。されど、これこの技藝は、其の技の妙をればゝ、その藝の奧をきはめ、その技、その藝の妙手といはれ、達人といはれ、これを以て一家を爲さむと欲する者は、もとより深く學ぶべく遠くきはむべきわざにはあれど、さらぬきはの女子には、前に述べ列らねたる道々ばかりに、必ず缺くべからず、知らざるべからず、學ばざるべからずといふべきものにはあらず。いと間接の利益を有せるものなり。

文學、繪畫、音樂、花生などの道は、人に高尚優美なる快樂を知らしむるものに

て、自ら人の心を高尚優美になすものにて、茶の湯などは、いたく禮義を謹むものにて、女子の立居振舞をして、やさしく靜かに優美ならしむる益あり。故にこれらの技藝は、いとまあらば、叶ふべきゝはの身ならば、是非に一わたりは修められたき道まころ。されど、これらは、これを以て身を立て一家を爲さむといふ女子にあらずば、女子には間接の學事にて末のものなれば、これが爲めに、前にあげたる大切なる直接なる、本なる學事を、ようようち捨つるやうの事は、ゆめ〳〵。

村上天皇御製

をしへれく
ことたかはすむ
行くすゑの
道とほくとも
跡はまはむはじ

女子教育一班（二十八）

三輪田眞佐子

第三、自衛の智識、女子の幼きころは、父母これを育て、長じて嫁すれば、良人これを養ひ、既に老いぬれば、子孫これに事ふべきを以て、女子の生涯は、殆ど獨力にて生存することなきが如し。さればにや、古き文にも、女子たるもの、家にありては父に從ひ、人に行きては夫に從ひ、夫死しては子に從ふべきを以て、敢て自ら遂ることろなしとあり。こを裏面より考ふれば、母にしてなほ萬事子に從へとの意にあらず。唯、女子は全く孤存獨力にて生存するものにあらざれば、寧浮世の苦勞を　男子に讓ると等しき心ならんかし。

思ふに、三從の敎は、わが國女子の男子に對して、謙退する女德を養成せし効あること明ならんも、一得一失はおのづからなるものにや、なべて女子は、人にのみ依賴する氣風あるめり。勿論依賴すべきことを依賴するは、毫も間然すべきものにあらじ、

されども、依賴すべからざることさへ、人を恃むは良きことにあらじ。さて、依賴すべからざるものとは、何を言ふか。曰く、自衛の智識になんある。そも〱人の天地間に生るゝや、男子にまれ女子にまれ、將た老いたる者も、若き人も、互に相助け、互に相頼るは、自然に必要のことならんも、既に我なる別身の存ずる以上は、我は社會に如何なる地位を有ち、如何なる天職を享くるかを知るのみならず、生命、肉體、あるは德望を全うする所以の智識なかるべき。れのれはかくなん、生存に必要なる智識を、總て自衛の智識とは言ふなり。

蓋し自衛の智識なきものは、我なる別身は在らんも、人の供する食を待ちて生き、人の與ふる衣に由りて存ずること、さながら庭園に養ふ鳥獸と撰ぶところなからん。れのれは、世の女子が、獨立を唱へて父兄の命を守らず、男子とさへ競爭せんとするを惡むなり。されど亦、女子の精神ばかりは、獨立するに堪ふる實力ありて、家にありては父母に苦勞を及ぼさず、人に嫁ぎては、良人と偕老を契るに足る能力あることを欲りするなり。無爲遊怠にして、男子にのみ寄食せんとするは、女子の辱にこそ。誰か紫色嬌を呈して、大樹にまとふ藤蔓よりも、秋風颯々の野に忍ぶ、女郎花をあはれとめでざるものやはある。

李白の江上の吟に、功名富貴若長在、漢水亦應西北流との句あり。實に沈思默坐して、人生を達觀すれど、昨日榮華を極めしものも、今日困窮に泣く例あり。わきて自衛の智識なき婦人は、良人の功名富貴を夢みし間は、著しき欠點見えざらむも、「散るころ花の盛なれ」との世のならひにしあれど、一朝その門地の衰ふるとき、忽家名を辱しむるのみならず、一身を保つことさへ能はざるべし。あるは良人死して墳墓の土、未だ乾かざるに、あはれ見るだに厭ふべき失態を現はすもの少からず。良人もし靈あらむ、地下にて將に哭するならん。慶長五年、豐臣氏譜第の臣なる毛利勝永、關原の役に敗れて、妻もろともに土佐の國へ流されしが、同十九年のころ大坂籠城のことをきゝて、さすが丈夫も涙の袖をしぼりつゝ、妻に向ひて曰ひけるやう。われ士の家に生れながら、武運の拙きため、かゝる孤島に流され、祖先の名を辱しめて止むこそ、返返も口惜しけれど、今この島をのがれ、大坂に趣き、城を枕に死せむやと思へども、後に殘るべき汝れ等の身こそ、うしろめたけれど。その時妻莞爾として答へけらく、そはもとより望ましきことになん。いざとく遁れ行きて、積年の恥をそゝぎ給へやと。よりて勝永心を定めけりとかや。あはれ自衛の智識なきものは、かゝる萬一の秋に際して、いかでか適當なる處置をなし得ん。戀々袖をひきて、良人の大謀を誤らしむるも

のは、自衛の智識なきものゝ常にこそ。されど、女子は生理衛生等の學をも怠らで、寒暑の害を蒙らず、經濟の道をも知りて、生活のよすがとなし、進みては、心術を訓練するに足る諸の學を修めて、世態如何に變動せんも、境遇如何に移動せんも、我なる觀念の消失せざるやう能力を養ふべし。かの、世に體を攝生する能はず、身を清淨に、神聖に、將た安全に保つ能はざる女子多きは、敎育の方針、一家のため、良人のため、あるは兒童に向ひて、婢僕に對してのみ善かれよかしと、殆ど他人のためにする學術に偏して、我は如何身は如何と、自身を修むることを忘れたるによらむ。されど自身を修むる能はざるもの、いかでか人を益せん。おのれは、女子敎育の行はるゝ今日、なほ女子と小人とは養ひ難しとの語が、事實なるを欲せず。いそしみはげみて、女子も完全なる人とならんを願ふなり。

貞女兩夫に見ゑずといふことを

加藤あい子

貞女兩夫に見ゑずとは、其のことわりいとも見易き事にして、しかも女子には、こよなく重き戒のふしにぞある。げにや古の聖人の、愛に露けき胸裡より溢れいでたる滴々なりせど。

さるを、近き頃の人は、れはけなくも、この尊き戒のふしぶしを、さらぬ方に解して、再婚を勸むるやからの多きぞうたてきことのきはみなる。とりわけて、この道にかけては、世にもきこえたる福澤翁の、さるよしなきことを、一たび唱へろめしよりは、鶴の一聲とやらんのならひにて、いたく人々の心を動かしぬめり。さては近刊の女學雜誌にも、さる同感者をいだして、ます／＼世の淑女をあやまらしめんとはせり。これや、妾が、ものかずならぬ身としりながら、をこがましくも、このひとふしを、いひいでんと思ひたちぬるゆゑにぞある。あはれよの人よ、辭を以て意を害することをななしそ。

「たらちねの親の許しゝ、敷島の道より外のみちやゆくべき」と過ぎにし人は云ひのこせり。げにしかありてこそ、人とも、女とも、いひねつべし。女子の守るべきは、貞操なり。貞操たかき女をこそ、貞女とはいふなる。さらむ貞女たらんには、つかのまも、貞操を忘るべからず。菊池三溪ぬしが、常盤をよめる詩に、

飢可忍躬可死、掌中之珠倘可毀、婦德唯在貞操存、貞操一缺百事已。

といひけんは、げに妾がこゝろを得たるものなり。

さては貞操とはいかなることをかいふなる。貞操とは、過ぎにし女鑑第百十七の社說

にものせられしごとく、人の妻となり、母となり、よく舅姑に事へ、夫に從ひ、よく夫を輔けて、家を整へ、子女を敎養して、くちをしからぬを。と、さるべきはもとよりなれども、わきて貞女兩夫に見ゑずとの心根をこそしかいふべけれ、一たび嫁きては、不幸にして家亡び、夫死すとも、貞節を破りて、夫をかへざるをこそいみじき貞操とはいふべけれ。

さるを〳〵、學びの道の父とも、母とも仰がるゝなる福澤翁は、貞女兩夫に見ゑずてふことを、解していひけらく、

貞女兩夫に見ゑずとは、正に女子は同時に二人の男子に添ふべからずといふ事なり。されど一たび其の夫と死別、若くは生別をなしたる時は、更に他の夫を求むるも差支なし。此諺の意味は、斯かる場合にも、決して再度の夫に嫁ぐべからずとの意義にあらず。

一犬噓を吠ゑて、萬犬實を傳ふる世の中ぞうたてき。さるかさらぬかはしらねども、近刊の女學雑誌上女德の美觀をあげつらへるくだりに、

貞女兩夫に見ゑずと、古聖人が誡め置かれたるは、其昔には或は妻たるものゝ、不幸にして其夫と死別若くは生別の悲をなしたるの後とても、決して再度の夫に歸ぐべからずとの意義にてもありけん。されど自ら進んでこの訓戒を守操するはよし、さもなきに、萬人をしてこの嚴格なる規律に、强ひて服從せしめん

とするは、頗る人情に戻れることなれど、學説正大に、理義分明なる今の世迄も、さる壓制苛酷なる道徳説を維持せんこと、甚た誤れりといふべく、彼の訓戒は、正に女子は同時に二人の男子に添ふべからずといふいとも、明了なる人倫を規するものとして見るべきなり（第一論旨）

馮浄翁なども、此頃頻りに此義を論ひて、若き未亡人をして、爵愛隱々の裡に寡居の苦味を舐めしむるは、即女性の眞相たる愛情を害して、且つや淋さの思ひに、憂き節しげき歳月を送るに中には、人身の生理欺くべからず、精神爲に枯衰し、遂に病魔の犯す所となりて、死する例も少なからず、結婚は人生の一大事、赤縄の縁を結びたる江上、夫婦爲に同体となれは、漫りに之を破るべからざるも、死生命あり、人生死別の悲痛あり、夫死するの時に於ては、飜然覺悟を改め、第一生の昔を忘れて、神氣爽然、第二生の境界に入るこそよけれ。これそ世路に旅する女流が、大自狂の安心法なりとの趣旨を説きたり。元良情士も亦嘗て、略ぼ同様の説議をなして、東洋流道徳の羈絆より、寡婦の身を天放自由ならしむべしといへり。（第二論旨）

とのべたり。げに西洋道徳思想の根源たる、基督敎の倫理に於ては、さるよしなきこともなかく＼に、めでたきことわりのふしぶしならめ。基督は七人の兄弟を、遞次に夫と事へたる一人の婦人に向て、死は此世の夫婦の縁を斷了するものなり、との意を示しぬるを見てもしりぬべし。しかはあれど、道徳は社會によりて、其標準を異にす。

われには、千古以來、しみにしみたる、いともめでたき標準のあるものを、わりなくむげに、かれにならふべきことかは、いでや福澤翁の解釋の誤れりと信じぬるふしをあげつらひ、次に女學雜誌上の論旨に及ぼなん。

福澤翁は、貞女兩夫に見えずとは、女子は同時に二人の男子に添ふべからざる義に解せり。もしさる意味なりせば、などかく貞女などゝ、いみじくことごとしき様にいひなして、戒のふしとなすに足るべきや。二人の男子に同時に添ふべからざるは、いはでしるけき女子の道ならずや。ひとなみの婦女だにも、心得もし、行ひもしつゝ、あることならずや。さるを、ことごとしく、古の聖人の誡め給ひつるは、夫と生別、もしくは死別後に、女子の處すべき道の、いとかたければなり。夫と生別死別後にも、くれ竹の節をれしらぬつよき心の、ひとすぢに、二夫に見えずして、已みぬるをこそ、貞女とも云ひ得つべけれ。もし福澤翁のいひけんごとく、同時に二人の男子に見えざる義なりとせば、さることは、たゞひとなみの女子のみななすべき常の道にしあれば、などか、ことごとしく貞ある文字を女の上に冠せしむる要あらんや。貞女とは、夫と死別後生別後にも、なほ閨中の節を守るにぞ、しかはいふなれ。二人の男子に同時に見ゆる女子は、女子といふべきものにあらずして、女子以下のものとすべし。見よや

君子とは、凡人の中にて、道徳すぐれたるものに、わきて與ふる辭ならずや。貞女も亦しからざるべきかは。

故に貞女兩夫に見えずとの意義に就ては、福澤翁はあやまれり。貞女兩夫に見えずとの義は、一生一夫の操の色深き辭の露の滴々としれよかし。妾人を責むるにあらず。過ちありとしりぬれど、たゞその誤れりと言ずるふしをあげつらふのみ。

次に、女學雜誌上の說の要點をつみあげなど、

第一、貞女兩夫に見えずとの意義は、昔と今と解釋を異にすべし。

第二、人身の生理上、再婚の必要あり。

との二つになしうべし。あはれ第一の論旨の如く、昔と今と解釋をことにして、夫死して、更に他夫に嫁ぐべきものとせんが。もし子などあらんに、敎養するによしなかるべく、父母あらんに、ゐを見すてなど、如何にせん。わがうけつぐべき家を如何にせんや。もし夫うせなど、正し貞操を守りて、よく舅姑につかへ。夫の遺志をつぎて、家をたもち、又家をつがすべき、わが子をも、さるべく敎養することそわが敷島の道なりけれ。

第二の論旨もあやまれり。無形の心は、有形の肉體を支配す。かの禪宗とやらんに、

森羅萬象、皆我心と云ひけんを見てもしり得べし。心にて既に貞操の凛烈を見る、なぞかは肉體の賤情に犯かされて、病魔の競す所となる如き、いまはしき事のあるべき。生理的の作用をうけて、鬱憂に沈むものは、その心根高からざるがゆゑなり。さらば、かゝるはしたなきことをうれへんよりは、女子の德育を盛にして、そが心志を高くせしむるこそなかく〱ならめ。

君子の言、尙過ちなしとすべからず。小人の言、必ずしも眞理を含まざるにあらず。あはれ世の淑女の君々、世にも尊き人の口より出でしのみを見て、むげにそを眞理とな思ひ給ひぞ。さりとてつたなき妾がものせしとて、むげに見すてな給ひぞ。

最後に棚橋絢子の君が、婦人弘道叢誌によせられたるひとふしをあげて、この論をむすばんとす。

此頃、或軍人の妻、年は二八ばかり、嫁していまだ六旬ならざるに、其夫死せるを以て、擧家再嫁をすゝむるをさけん爲め、髮を剪り、學業に從事せり。一日己れが家に參り、獨立の方針をとひ、泣血淋漓たり。己れも覺えず涙に袖をぬらし、しばしは答へも得せざりしか、やがて思ふやう、大凡不幸と云ふ中にも、幼にして父母を失ひ、嫁して早く夫に後くれしほど不幸なるはなし。此女子、既に父を失ひ、今亦夫に別る、實に不幸中の不幸なるものなりと、因て之を諭していへらく、

獨立の道かたきにあらず。只終生精神の誠を失はざる難きを憂ふるのみ。古人もいへり、精神一到何事かならざらんと、請ふ將來一意に、其思ふ所を貫く誠を失ひ給はざらんことを、其餘のことの如きは、機にのぞみ、變に應せんのみ、豫定すべきにあらずと。
女子唯々として去りぬ。嗚呼女子をして、今日の誠を貫かしめんか、獨立は愚か、將來婦女の模範ともなりぬべきや疑なかるべし。これ已れが諭すにこの一言(誠なる)を以てしたる所以にぞある。



史談

毛利豐前守勝永の妻

鹽井ふく子

周には三妾あり、また我國にも豐公の北の方、加茂眞淵が妻等。婦人の力、よく男子を助けて功ありしもの多し。此處にしるさんと思ふ毛利豐前守勝永の妻なる人も、また、よく、女の病といはるゝ姑息の愛情を忍びて、よく夫をはげまし、いさましめし後見くらからぬ夫人なりけり。

勝永の父は毛利壹岐守勝信と云ひて、關白豐臣秀吉公に仕へ、天正十五年六月、豐前二郡を賜はり、小倉の城に治す、秀吉公征韓の際なども、兵に從ひて韓に渡りし事前後二度なりきとぞ。のち秀吉公みまかりたまひて、慶長庚子の年、石田三成、德川家康公の秀賴公に利あらざるを識り、之を除かんと欲して、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝の三老に結びて、兵を起し丶折、勝信親子もまた之に加はりて、小倉の城に據りしに、たま〳〵黑田長政、人をして小倉に來り、勝信にいはしめて曰く、吾れ嘗て足下と太閤の床下に於て舊識あり、今足下、三成に黨して旗を揺かすは、恐くは良策にあらざらん。三成の敗亡立ちて竢つべきのみ。然るを徒らに城に嬰り、士卒を傷くるは頗る不仁不智なり、宜しく城を致して衆を救ふべし。足下、もし、我が言を入れなば、ために恩宥を請ひ、舊誼を修めんと欲すと。勝永やゝさとる處あり、遂に出で丶降り、髮を削りて一斎と號し、遁れて京師に住ひぬ。已にして事平らぎてより、領地を沒收せられ、更に采邑千石を賜はり、勝永夫妻と共に土佐に謫せられ、遂に勝信は配處の土となりはてぬ。

鹽やく浦のいぶせさは、年久しくむすぶなれにし海士の子さへ、袖はしぼるものを、之は太閤の麾下にも、功多く、流石に世にも時めきしものゝ、知らぬ磯わの浪風、配

所の月、如何ばかり住みうくも、つらくも思ひけん、よる浪ばかり吊ひ顔なる荒濱に、むなしく歸鴻に、來燕を送迎することはや十余年。慶長十七年とはなりたり。その冬秀頼公、家康公と御中わろく、兵を擧げて、勝永を招き給ひしに、もと勝永が石田にくみして、かゝる離れ小島のかなしき浪の音にぬるゝも、主君の子を思ひてよりの事、今その主君の子の招き、如何で應せでやは。勝永が心はればるばかりなるものから、また思ひ決せぬ事もありけり。さてあるべきにあらねば、密に妻に謂ふやう、我さきに誤りて石田に與し、御身と諸共に、かゝるはなれ島に、漂流して、あだし浪風をすごし居るかなしさ、今一度むかしに引きかへして、武士の汚名をそゝがまほしと思ふ心は、あづさ弓、眞弓、朝な夕なに、かけてくやしきを、今幸に我一の志あり。されば漫に御身にもらさんも壁耳の恐れあれば、もだし居りたれば、日來の志をも知りたれば、今吾れ汝に明さんに、必ず我言をもらし給はざるかと云ひしに、妻女はきつと形をあらため、妾、古へより親のをしへ、ものゝ書にて聞き侍るに、夫妻はもと一身一體とも申侍れば、何とて二心をもち侍らん。よきもあしきも、良人ともろともにうきつ、しづみつせんこと、女の道にて、妾も願ふところ、不束なれば影とも思さば、君の志をつげ知らせ給へかしと云ふ。

勝永、よりて、つぶさにその志を語り、かつ曰く、我が家武名を以て天下に振ふことこゝに六世、しかるに、今われ此の邊土に謫せられて、武士の太刀、劍、收めはてゝ、身もむなしくかへらぬ浪に消ゑはてんこと、我が本意にあらず、幸に今東西分裂して、干戈將に起らんとす、我れもと秀吉公の麾下、身命を大坂に獻せば、一には主君への微忠、二には我が汚名をそゝぎ、むなしく邊土の鬼となり給ひし父君の亡魂をもなぐさめ奉るにも足りなむ。されど、我れ、いま、にはかに出で去らば、妻子等の捕はるるは必定、之れのみ我が志をさまたぐる處なりとて、愁然として語りけるに、妻女はきくより、大によろこび、さばかりめでたきうれしき事を、君は何とて憂ひ給ふぞ。妾、女なれども、武士の娘、武士の妻、夫が大事をあげさせ給ふを、いかでよろこばざらん、今かゝる機を失ひ給ひて、日來の宿志をも撓屈し給はゞ、恥に恥を重ぬるのみにて、今の配所の月に、むせばんよりは、一入に、くやしく、かなしく、住むかひもなく侍らん。君もし大坂城に戰死せば、妾また身を此の海水に投じて、死を共にし侍らむ、いづれ、いつかは失せぬべき人の命、きたなき名を万代にながして、僅のほどととまらんよりは、いさぎよう身を海底のもくずとなさんこそ、中〳〵にまさり侍れ。もし夫君利あらば、その折はうれしく尊容を拜し奉らん。いで先きんずれば人を制する

と申す例も侍れど、速に出で立たせ給へ、妾めゝしき女子なりとも、武士の道に出で立たせ給ふめでたき夫君の御かど出の袂、いかで暫くもひきとめ侍らん。今よりは御歸りのほどは待ち侍らん、いさぎよき聞ゑのあらん事をまち奉らんのみ、君、必ず武をけがすことなく、必ず〳〵後事を意にかけ給はで、隨分御功名たてさせ給へとて、始終從容として、容貌をさへみださず、はては夫と、嫡子勝家との物の具をさへとり出し、甲斐〳〵しく諫めたてしに、勝永大によろこび、莞爾たる笑みを殘して、その日嫡子と共に、大坂城へと赴きけり。

夫人は海邊まで送り出でゝ、父よ、兄よと、呼びさけぶ幼きもの等を叱りて、たゞ白きさゞぎ、とびなどの、飛びゆく如き白帆、見送りに見送れど、いつしか影も見ゑずなりぬ。流石にたゞへにたゞへし涙、ゑこらへず、たぎちれちて聲あり。まん〳〵たる海水、みち〳〵し涙、はてもなき折りから、山内忠義、果して此の事を傳へ知りて、にはかに、妻子を捕へて家康公に訴へたり。

妻はもとより思ひまうけし事、少しも動せず、從容として捕につきしに、家康大に感じて、丈夫の志あるものは、みな此の如し、よろしくろの妻子をむ宥恕すべしとて、忠義をして城中に養はしめぬ。

勝永は難なく大坂につき、秀頼が麾下の隊長となり、兵三百を督して、防禦力戰、あたるべうもあらず。明年夏の天王寺の戰にも大にいさみたけりて、切りまはりて、首をうること幾十級なるを知らずと云ふ。已にして軍敗れ、勝永親子秀頼に山里廓に從ひ、遂に快よく自殺なしはてしは、實に慶長十九年五月五日なりきとぞ。まことに勝永がいさぎよき武士のはてをなせしも、夫人從慂の力、またあづかりしなるべし。

阿部伊岐女

宗村信喜

皇みいくさに射向ひまつれるにはあらねど、時運と遭遇とによりて、心にもあらぬ逆賊の汚名をかゝふり、屍を原上にさらし、怨を九泉にとゞむる者あり。乃向ふものは、いかなる情實の憐察すべきものあるも、亂臣賊子の名は、のがるべきにあらずなむ。就中國を憂ふる情あまりて、事を起し、大御代の塵を拂はむと振りれてしたる大和雄心のとはらずして、賊名を負ひたる斗り口惜き者はあらず。其の逆軍にくみしたる夫にとつげりしもの、節操高しとて如何でか賊名を蒙らざらんや。しかはあれど、節を持して夫の難に殉したる雄々しき心は、まことに萬世の鑑とするに足るべき者あり。あはれ熊本の諸孃よ。春の朝花に狂ひ、夏の夕涼を納るゝ暇あらむ、行きて其の芳魂を

弔ひ給へ。新屋敷町より程遠くはあらぬ上河原の阿部伊岐女が奥つきぞ。

伊岐女其の性質優にやさしく、その心根のめでたきは、花の如き姿に溢れ出でつゝ、一ふしあるとふしざゝむら竹、いさゝかのあだなる事もあらざりき。花ならなくに、吾が住む宿に植て見ましことは其の頃の雅男がすき心なりけむ。さて生みの父母に仕へたりしさまを拙なき筆に記さんは、おのれ等の及ばぬ所なるべし。いでや阿部氏に嫁して姑夫に仕へたりし一二の事實を、神焰稗史によりてしるし連ねむ。其の餘は讀たちのみ心に推し量り給ひねかし。伊岐女年十六にして阿部氏にとつぎぬ。朝夕姑を敬ひかしづく事まことの親に仕ふるに異ならず。布を織り衣を縫ひ、かひ〴〵しく立働き、殊に和歌の道さへ兼ねたりき。あはれかうやうなる女子こそ、はかなきあだ事をも、實の大事をも打ち語ろふ者なりけめ。夫景器は慷慨節義の士なり。明治四年の春、筑後久留米に事あり。景器其の事にかゝづらふとて嫌疑を蒙り、吏の爲に捕はる。伊岐子その間、姑に親しく仕へ、常に身にまく細帶の、今こそ分るれ、末の樂しき世に遇ふ時もがなと、一筋に神に佛に、夫の無事を祈りて、其の消息のあらん日を待ちぬ。夏の夕蚊帳の外にあり、より〳〵毎に夫の行へを打ち案ずるをいとあはれときこゐて、若ぬしが身にいたづきの起りもせむ、惡かりなむ。身を全くして、まつが貞婦

の道なるぞやと、母のの給ふを、それさる事に侍れど、良人の阨におひて、苦み給ふを、妾家におりて、安くねぶらむ事、本意なき業なり。妾の身は枉げて妾に任せ給へと辭みては、短き夏の夜もすがら、明し兼ねきとなむ。其の夜每〳〵の夢は如何なりけむ。景器許されて、家に歸りぬ。其の家元より豊かなるにはあらねど、柴のあみ戸のあけくれ、立ち昇る烟、心細うのみ暮しつゝありしに、或日景器外よりかへりて、伊岐女にさゝやくやう、さる町に腹卷一領あり。いとめづらしき品なり。金もあらで求めて緩急に供へ置く可きを、すべなやと語ろふに、其は安き事に侍り、いかにもして、御望を遂げさせ參らせむとて、密にれのれの着なれの衣、さては釵笄の類を賣りて、ろくそくの金を得て、夫に與へたりとなむ。夫の喜びいか斗りなりけむ。ろれやがて後日の征衣とならむとは。めでたき伊岐女の心やな。

明治九年の秋、熊本に敬神黨の亂あり。郷里あるは呼びて神風連の騷動といふ。烈女が夫景器は、この黨の一人なりき。花岡山さしている弓張の月を、暗き空に星影ふけし頃、筒の音関の聲かすかに聞ゆ。あといふまもあらせず。歩兵營の黑焰天に漲り、大砲營の號聲すさましく、馬狂ひ人猛り、天地も爲にくづれんとす。起き上りし伊岐子、夫の身に恙はれはさずや。痛手や負はざりし、吾せの君はと、心れかれしならむ。こ

れ空閨にありて夫の消息を聞かんとする貞婦の赤心なるべし。景器戰敗れて家にかへり、後の事など何くれと含めて自刃しぬ。

皇國の行ゑもとはで世の人は安けきみよとたゞ思ふらむ

氏が辭世なりとぞ。幾千世かけて契りしものを、いかで後れまゐらせやとて、共に自刄して幽界の人とはなりぬ。芳記僅に二十五。やう〳〵はゝゑみ初めし梅の花。一夜の嵐に遇へらむか如し。散りての後も匂かんぞし。

一筆申し殘しまゐらせ候　皆さま御機嫌よく御くらし遊ばされめでたくぞんじ上まゐらせ候　こゝもと景器實藏その他大野加屋富永はじめ事大にゑそんじ皆々百六十九人打死切ぷく私女ながらも夫の供仕り候みなさま御嘆き下さるまじき事

一母とき幷千代吉事宜しく兄上樣へ御たのみ下さるべく御祖父樣の御法事は上げ物はかりいたし申し候舊暦の九月八日騷動にて頓着出來申さず候何も〳〵申殘し度事山々に御座候得共私三日前より斷食致し申候間あやけの樣にて筆取り出來申さずまづこれ迄あら〳〵申上まゐらせ候かしく

世の中はいかにはかなき武夫の弓矢とる身の常とれもへぞ

伊岐子より

郷方

御母上様

末ながら皆々様へよろしく御病氣などなきやう御やうじん第一にねがひ上まゐらせまたく〲かしく

これ烈女が遺書なりとぞ。末に

まてしばしわれも倭の女郎花などなきくにの粟を食むべき

わが夫のなき魂まてよ二世かけて偕にわたらむ三途の川波

水茎の跡はかなう書きつけたり。何れ耻ぢざる節士女丈夫。亂臣の妻なりとて、いかで煙滅に歸すべけむや。節操稱するに餘りあるべき者を。

わかせこは　物なおもひそ　ことしあらば　火にもみづにも　われなけなくに

（安部女郎）

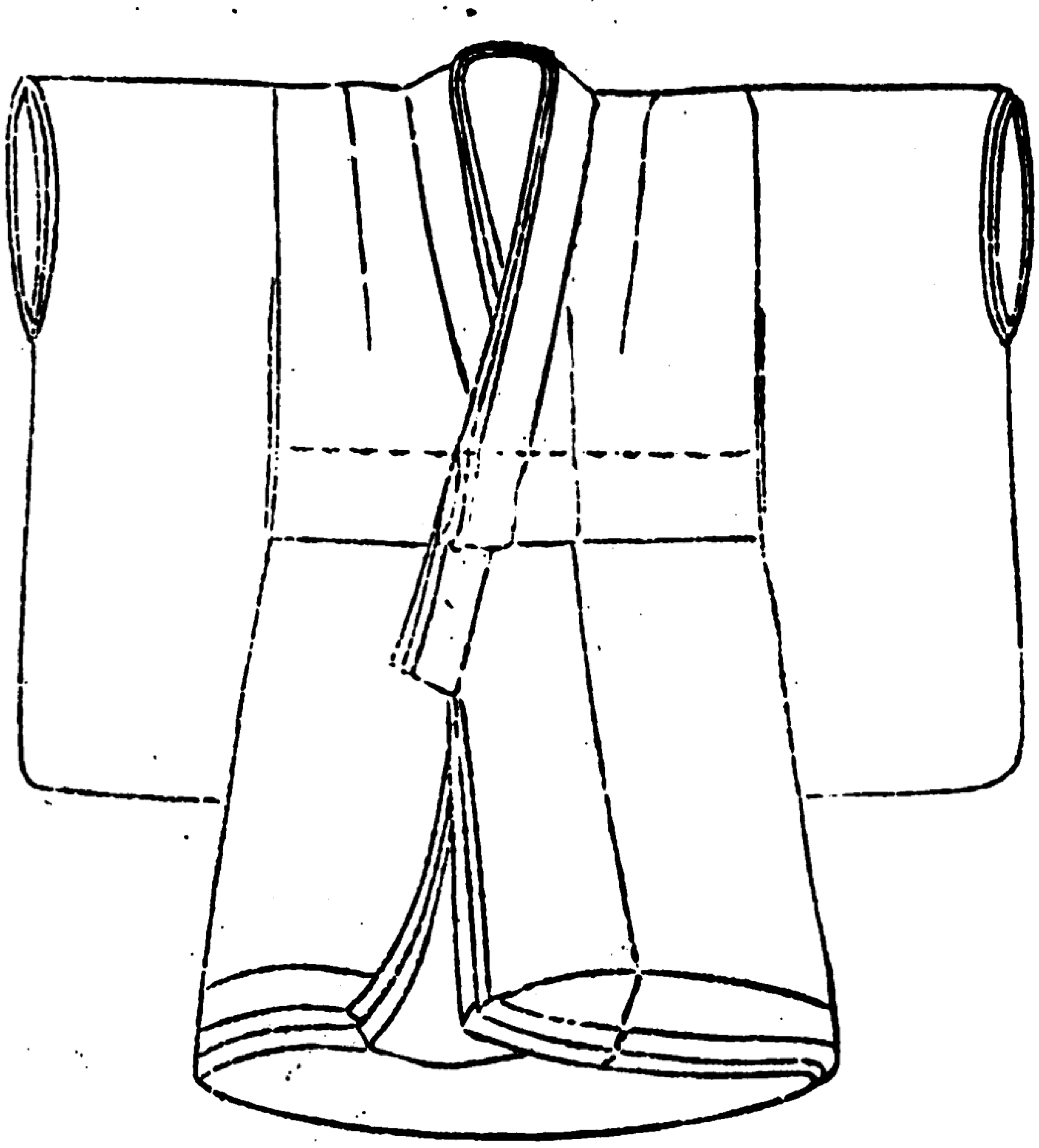
たちぬひ

西山たい子

(五十二)　中裁重物の縫ひ方

中裁重ねものも、一ッ身の重ね方に大方同じなり。袖口　上下とも同じにあげ、袖丈は下を三分つめ、袖付は二分つまり、うしろ巾二分、前巾一分づゝつめ、衽丈は片身にて二分つめてぬふべし。衽巾、衿巾、褄下、丈、ゆき、等は同じによくそろへて縫ふべし。肩あげ腰上げは、その子の大小によりて、見はからひてよろしきやうにすべし。

(中裁重ねもの圖)



寸尺等は、その子に應じてよきやうにすべし。

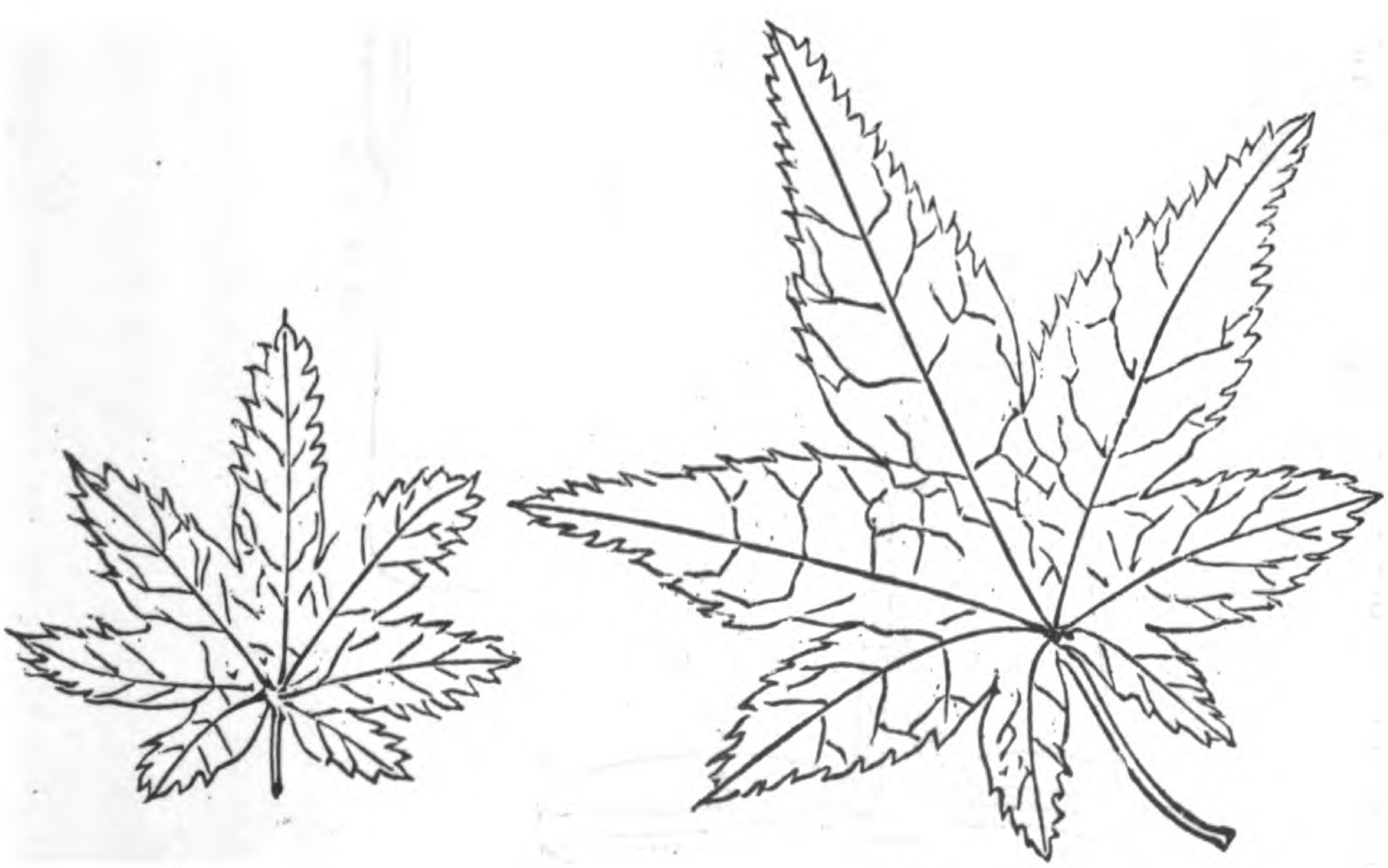
造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

紅葉

紅葉は寒冷紗に糊を濃く引きて乾かし置き、實物を採り來りて、其の形に合せて、仝し葉、數多を造るべし。色染するには、初め「オウラミ」にて黄色に染め、後「ヨーシン」にて今一度其の上を染むべし、中央の處は、「マセンダ」又は「コンゴレツト」にて薄黑く模糊すべし。斯くして乾きたる后、筋鏝にて實物の如く、筋を付け、細き針金に葉を仝じ色の紙を卷きたるものを付けて、葉柄とすべし、幹には「カシドラバルー」にて薄美濃の礬水引を染めたるものを卷き付けて造るなり。

第三十三圖　もみぢの葉

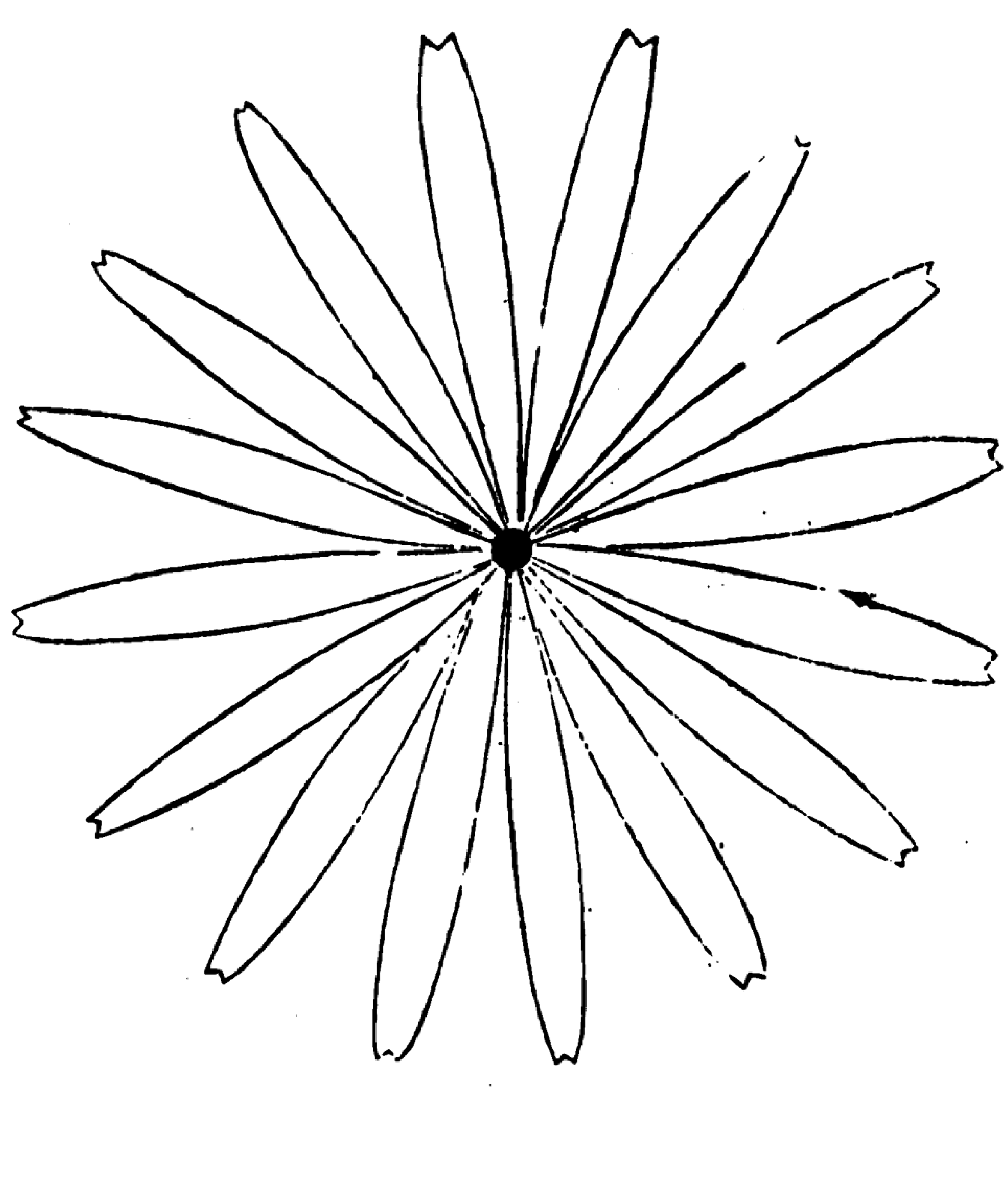


菊　紅牡丹、及び雪見燈籠

滿開の造り方、花瓣には寒冷紗、又は羽二重を用ゆ。寒冷紗は糊を拔きて后、極薄のりを引き、羽二重は其まゝにて、姫糊の極宜きもの又は姫糊の極く薄きものを引くべし。この布にて第三十三圖に示せる如く、大中小三種の大さ、各四枚づゝ都合十二枚（或は大小五種として、最も小なるものは三枚、其外は各四枚づゝ、都合十九枚とするもよし）を斷ち、圖の如く瓣各十六枚づゝを連ねて、適宜に形をとり置き、雪見燈籠なれば瓣の元を極薄く「オウラミ」にて摸糊し、紅牡丹に造るには其の廻りを「ローザミン」にて薄く摸糊し、形の如くに斷ちて、中央黒點の處にて、各々相連絡せしむ。かくしたる后布端を疊みたる上に載せ、少し熱したる菊鏝にて、瓣の先を押ねて引くべし。かくすれば、瓣には筋をのこして、内部に少しく背反るゝなり。

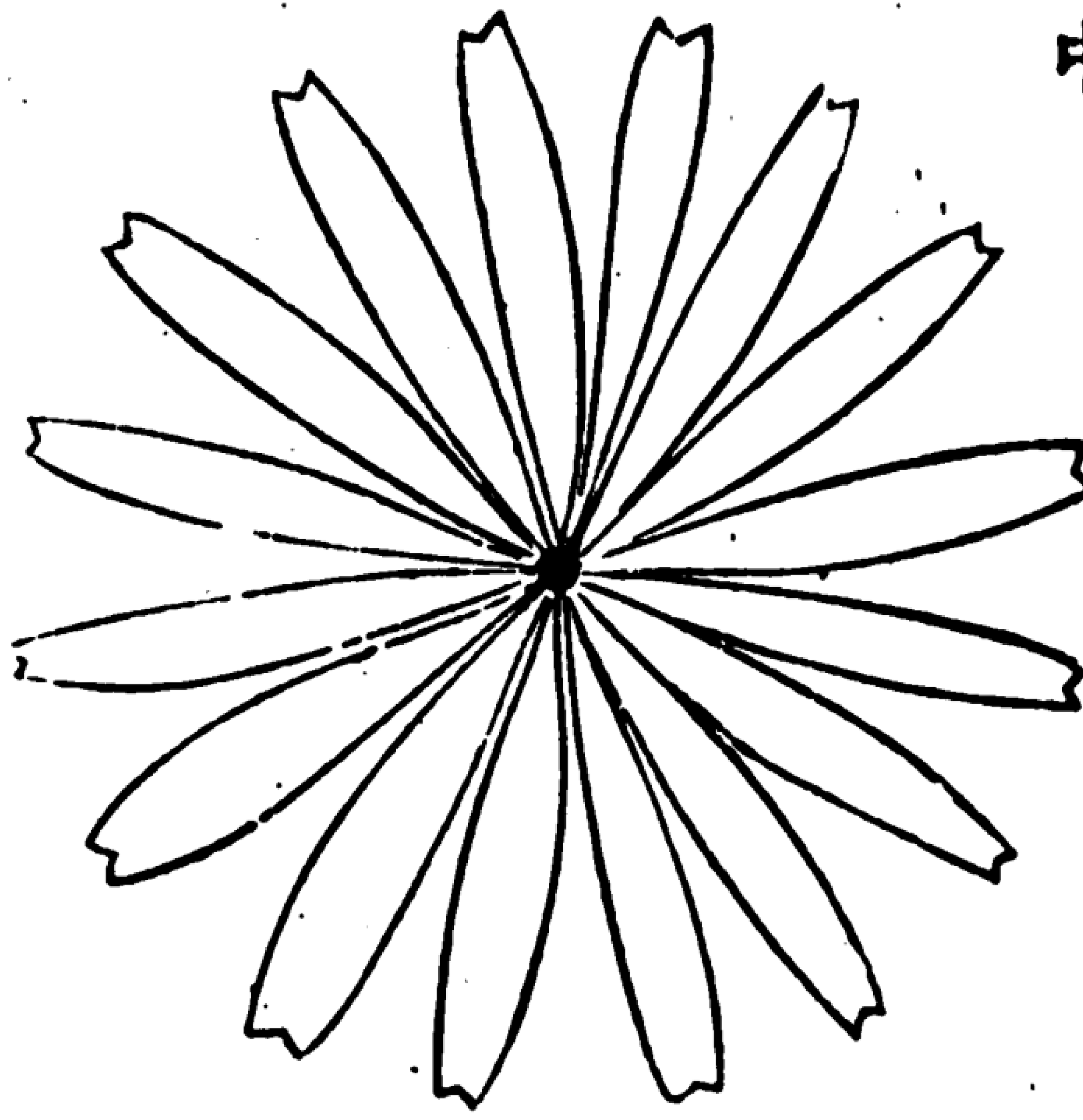
次に蘂を造るべし。蘂は黄色き木綿糸を、細き針金

大　第三十三圖



にて總子の如き形に絞り、其の先を短かく斷ち、針金は其の儘縱に延はして、莖の眞となす。この針金

中

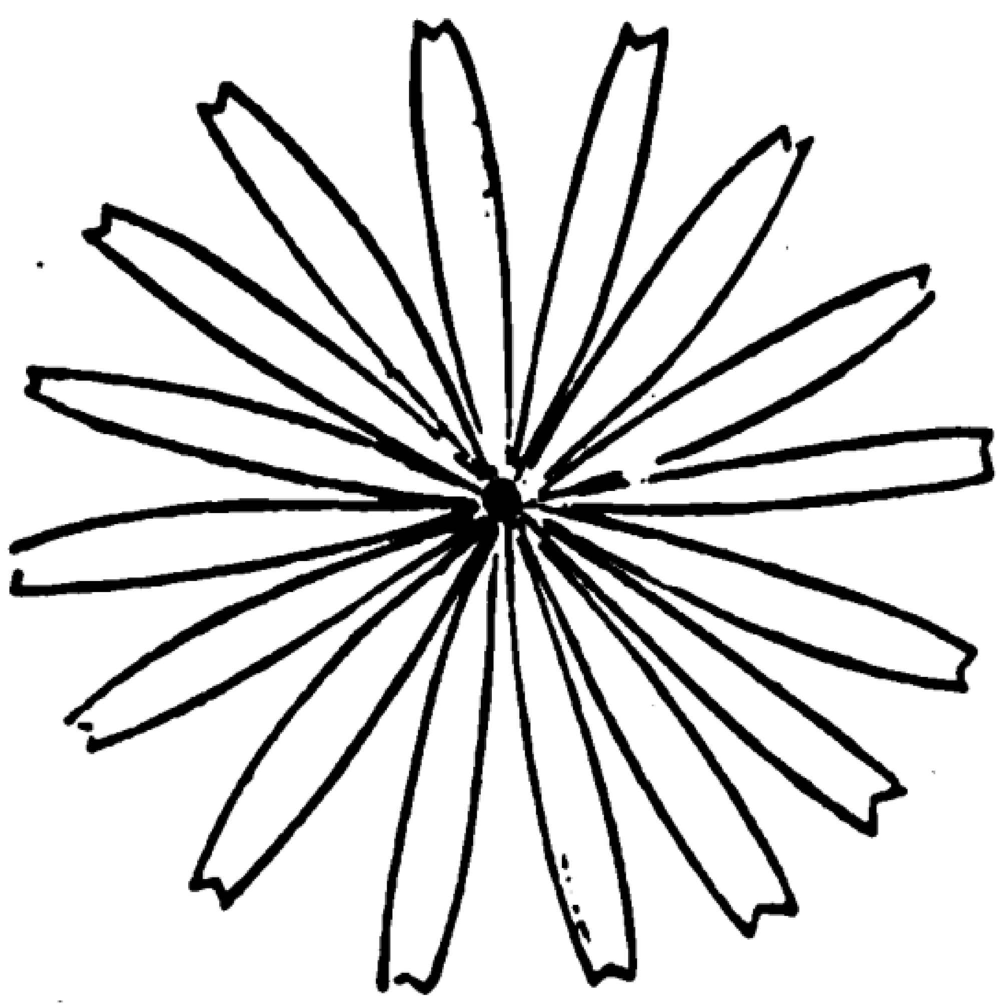


に前に造りたる花瓣の小より、漸々十二枚を通して、后、之に萼を付くべし。

萼は、寒冷紗にて、第三十四圖の如く、大小二種を造る。一つの萼には、大二枚、小一枚を要すべし。

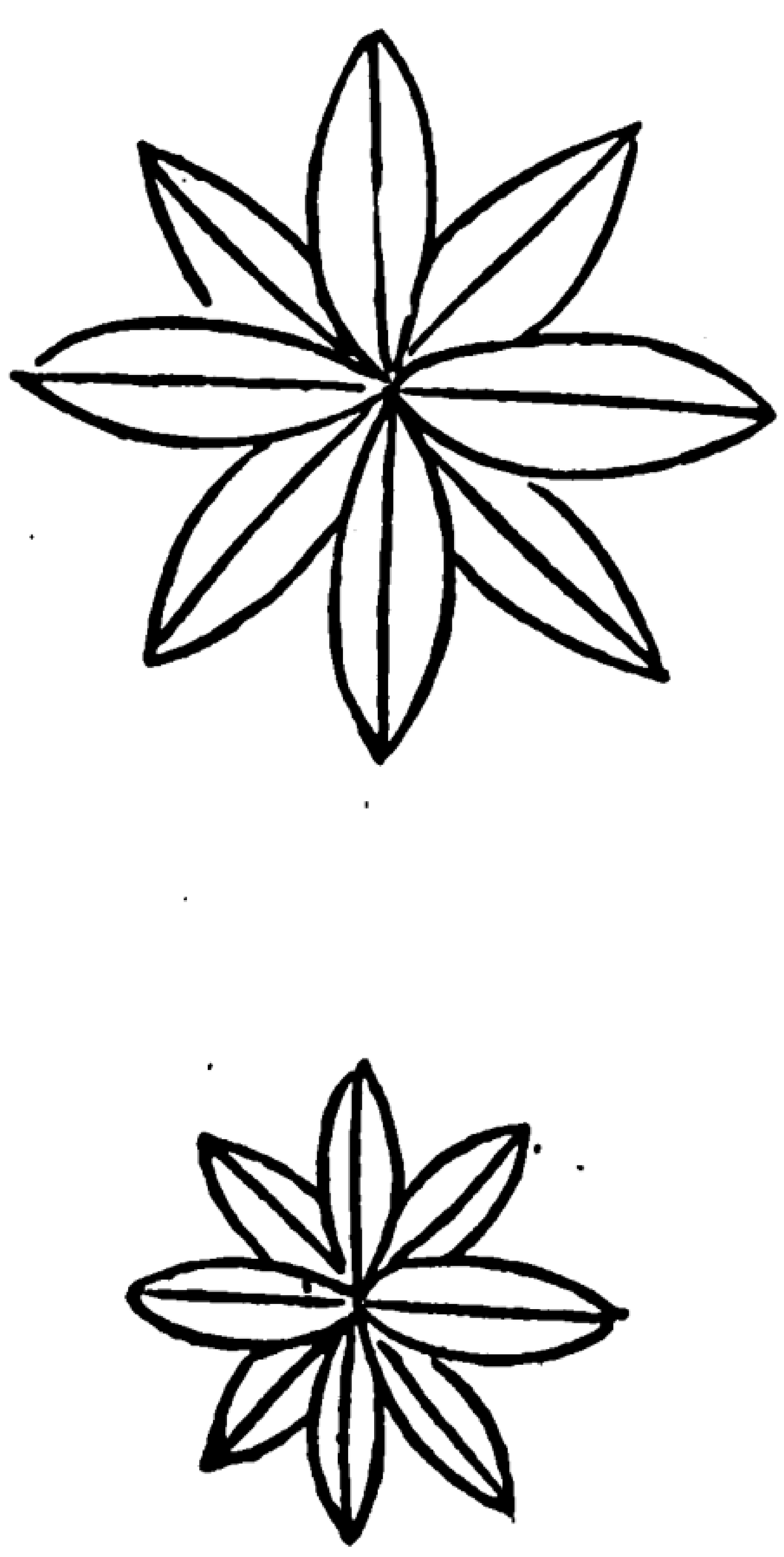
萼瓣は、各八枚とす。この形に断ちたるものは、薔薇の葉と仝しく、「クリンソ」四分「マセーンダ」一分「オウラミ」六分にて

小



普通の葉の色に染め實物を見合して少しばかすべし。

第三十四圖

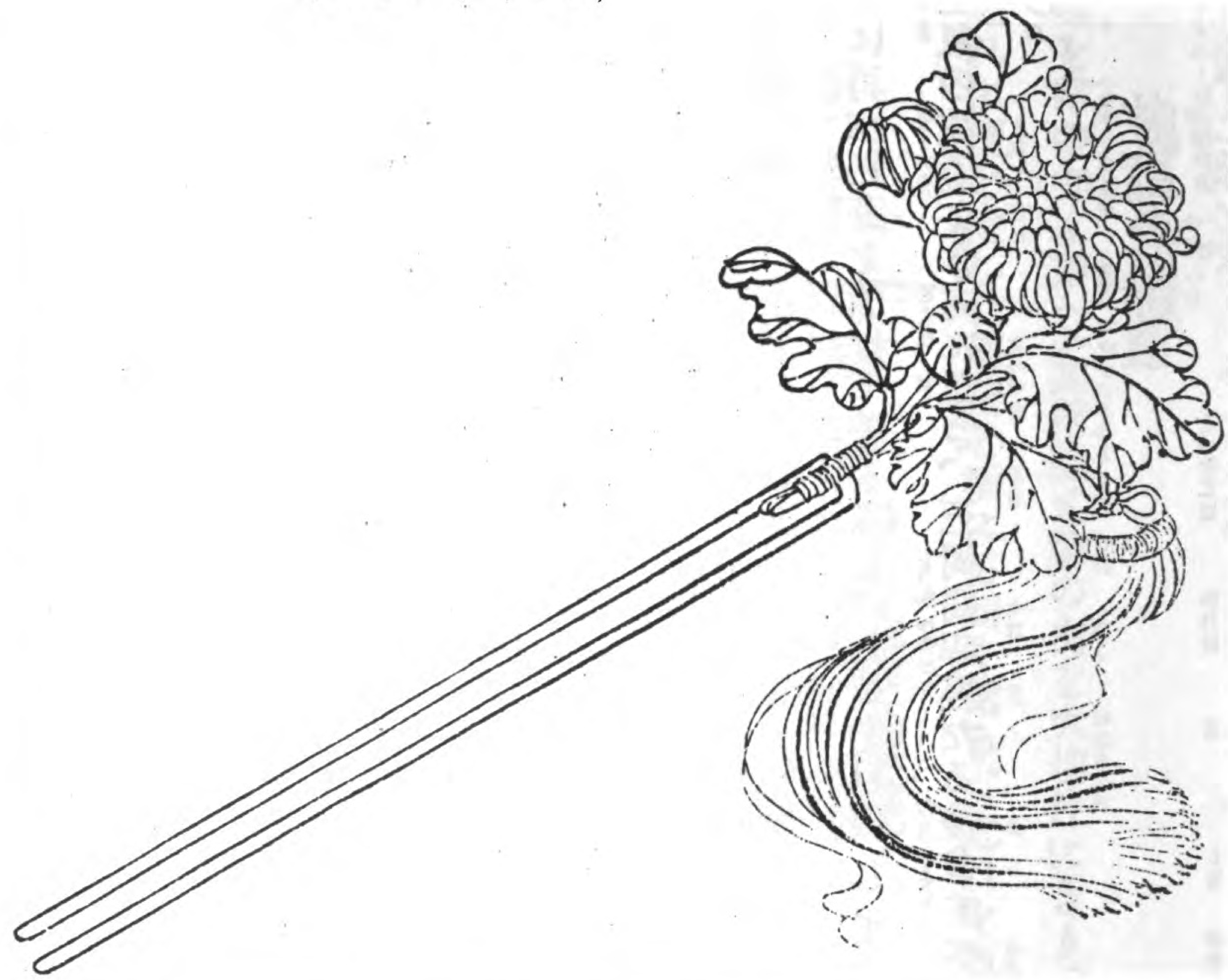


又褪色せざる爲に、染め汁の中に、明礬少許を入るべし。染め上りなば之を乾して、後蠟にて光澤を付くべし。之を萼にまとむるには、先に大二枚を通して后、小一枚を通すべし。

半開の造り方。半開は、滿開と仝じ様にして、花瓣の中と、小二種にて小く造る。尚一層小なるものは、小瓣のみにて造るべし。

蕾の造り方。蕾は蘂の小なるものを造り、花瓣を

第三十五圖



付けずして、直ちに之に蕚を付くべし。

葉の造り方。　葉は寒冷紗にて造る。先づ實物の形をとりて、其の形に順し、大小各種のもの數多を造るべし。色染め光澤出しなとは、皆蕚と仝し様にすべし。斯の如くして、各種のものを造り置き、莖には極く細く削りたる竹を入れて、其の上を青紙にて卷き、適宜の處に半開、蕾、葉等を付くるなり。但簪に造るには、多く莖を紐護謨、にて造る。第三十五圖の如し。

糸菊（白瀧、朝日鶴）

糸菊も、前に造りたるものと異なりく、唯かはりたるは花瓣十六枚を、二つ宛に割りて、三十二箇とするのみなり。而して白瀧と稱ふるものは、花瓣の先を極く薄く黄色に模糊し、朝日鶴と稱ふるものは、花瓣の先を「スカレット」と「フロツシ

ン」仝量を溶して、薄く模糊しに造るべし。

だいどころ

松茸の芥子漬

小さき松茸を擇りて、其石突をきり捨て、能く洗ひ、鹽を投れて蒸煮になし、其鹽汁を冷して、瓶の中に芥子を溶き、之れに松茸を漬て、一周間の後取出し、其芥子に、麹と、少量の醤油を加へ、能く攪交せ、此中に再び松茸を漬けて蓋をなし、其縁を目張して、空氣の流通よき處に置き、三周間程經たる後食すべし。

甘藍の酢漬

甘藍二株を取りて、其外葉と枯葉を去り、莖を除き、一葉を四ッ切になし、尚其葉を細長く刻みて、桶の中に葉を列べ、鹽をふり、又其上に葉を列べ、鹽をふり、段々に重ねて、其上に押蓋を載せ、石を置て重となし、二日間其儘置、三日目に葉を取出し、乾きたる布巾の上に列べて水氣を去り、其乾くを待ちて瓶に入れ、夫より酢三合の中に胡椒三匁、生姜、丁子各一匁を加へ、之れを沸騰たゝせて蓋をなし、其冷えたる頃、尚三合の酢を加へ、之を葉に注ぎて、葉沒せされば更に多少の酢を投じて、蓋をなし、目張して凡そ六周間程經たる後食すべし。

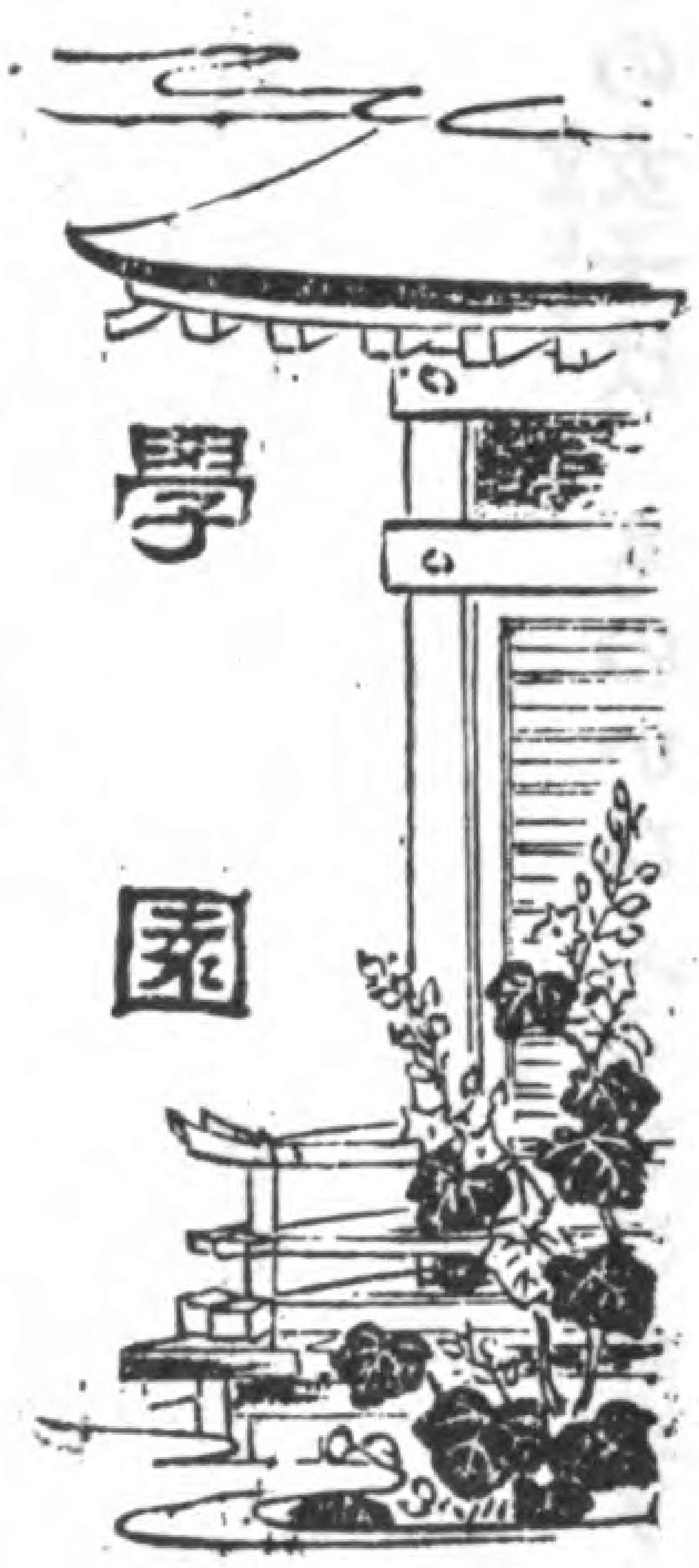
魚肉の麹漬

鯛、鮭、鰤、鱈、鮑などを常の如く拵へ、骨あるものは三枚におろし、能程にきり、之れを醤油にて濃く溶きたる麹に漬け、蓋をなし、三四日程ちたる頃食するを佳とす。其用ひ方は、麹の儘火に炙るべし、是

和洋両食に適するものなり。

鴨の糟漬

鴨を常の如く拵へ、其両腿と胸の肉を大切片にきり、之れに鹽を塗し、酒糟を酒にて固く溶き、之れを瓶の底に程好く投れ、其上に鴨を置き、又糟を投れ、段々に重ねて其上を糟にて覆ひ、能く壓し平坦して蓋をなし、目張をして、一ヶ月經たる後食すべし。是れも和洋両食に用ひて可なり。



日本文典（二十一）

鹽井正男

推量助動詞の「めり、らん」の二種を、前回に述べたり。なほ、ろが類の詞の品定めを引きもて續けゆかむ、

らし。これは、何にても、や、證據とすべきものによりて、必ずしかあらむと、推し量りいふ意の詞にて、あながちにわけなく推量するにあらず。例へば、古今集の歌に、

みやまにはあられふるらし外山なる
まさ木のかづら色づきにけり

といふらしを見よ。此の歌の意は、秋もふけ、露も深く、外山のまさ木のかづらも、はや紅葉になりぬ。この樣子にては、深山には定めて最早霰の降ること

ならむと想像したるにて、外山のまさ木のかづらの色づきたるによりて、深山には霰の降るならむと推量したるなり、外山のまさ木のかづらも色づきたり、深山は、外山よりなほ寒からむなれど、定めて、もはや霰もふるらしいと推量したるなり。斯くの如く、やゝ證據を取りて推量するなり。れなじ集に、

たつ田川紅葉ながる神なびの
　みむろの山に時雨ふるらし

このらしは、俗語にらしいといふ意と、能く似たり。例へば、

あの女子は、ものいひふるまひあらくしくて、まるで男らしい

などいふらしいと、能く似たり。何にても、やゝ證據を取りて、推量するなり。

この助動詞は語尾の變化せぬ、やがて、活動せぬ助動詞にて、動詞につゞく有様は、らんと同じさまなり。

ぬきみだる人こそあるらし白玉の
　間なくも散るか袖のせばきに　（伊勢物語）

いつのまにうつろふ色のつきぬらむ
　君が里には春なかるらし　（仝　上）

百年に一とせたらぬつくも髮
　われを戀ふらし面影に見ゆ　（仝　上）

いにしへは散るをや人の惜みけむ
　花こそ今はむかしこふらし　（拾遺集）

思はんとわれをたのめし言の葉は

わすれ草とぞ今はなるらし

（後撰集）

こゝにありて筑紫や何處白雲の
たなびく山のにしにしあるらし

（新古今集）

このらしの上に、け、或はつ、或はぬといふ助動詞を添へて、けらし、つらし、ぬらしなどいふ事あり。「けらし」は過去をあらはす助動詞（ける）に「らし」の添はりて、つゞまりしものにて、されど、毎時に、過去のことを想像推量する意をあらはす詞なり。例へば、古今集、

櫻花さきにけらしも、足曳の
山のかひより見ゆる白雲

やがて、此の歌のけらしは、「咲いたそうな」とか、「咲いたらしい」の意なり。伊勢物語にも、二段の物語りの所に、

獨りのみにもあらざりけらし

などあり。

つらし、ぬらしも、れはかた過去のことを想像する時に用ふ。古今集に、

さよ中と夜はふけぬらし。雁がねの
きこゆる空に月わたる見ゆ

（古今集）

これも、「ふけたろうな」とか「ふけたらしい」とかいふ意なり。

すべて、らしは、斯く證據を以て想像推量する意をあらはす詞にて、俗語に、「ラシイ」とか「ソウナ」とかいふ意なり。

けむ。　この助動詞は、過去のことを想像する助動詞にして、その語尾の變化活動するさまは、らむの

如く、たゞ「けむ、けむ、けめ」と活くのみ

終止	連用	已然
けむ	けむ	けめ

將然と連用の格とは、無し。動詞につゞくるには、必ず動詞の連用の格の下につゞくるなり。

昔、男ありけり。京や住み憂かりけん。東の方に行きて、住所もとむとて、友とする人、一人二人りして、往きけり。（伊勢物語）

いにしへの代々の天皇、春の花のあした、秋の月の夜毎に、さぶらふ人々をめして、ことにつけつゝ、歌を奉らしめ給ふ。あるは、花を戀ふとて、たよりなき所にまどひ、あるは、月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見たまひて、さかしおろかなりと知ろしめしけむ。（古今集の序）

いにしへにありけむ人の求めつゝ
衣にすりけむ眞野の榛原（萬葉集）

いかにめでたくをかしかりけむ御前にさぶらひけむ人さへこそ、うらやましけれ。（枕草紙）

このことどもはとゞむべし。すこしとしなどのよろしきほどこそ、かやうの罪えがたのことかき出でけめ。いまは罪いとおそろし。（仝上）

このけむの上に、て、になどいふ語を添へて、てけむ、にけむといふことあり。單にけむといはむより、やゝ語勢強く、やゝ過去の時も深くなる如し。

あはれ、昨日、翁丸を、いみじう打ちしかな。死にけむこそ、かなしけれ。（枕草紙）

沖つ波高く立つ日にあひにきと
都の人はきゝてけむかも
（萬葉集）

夏山に戀ひしき人や入りにけむ。
聲ふりたてゝなく時鳥
（古今集）

まし、　この助動詞は、元來、未來をあらはす助動詞なる「む」と仝じく、未來の動作をあらはす詞なり。故に、また、自ら推量の意をもあらはすやうなるなり。その語尾の變化活動するさまは、

將然	終止	連用	連體	已然
ませ	まし	まく	まし	ましか

と活動す。而して、動詞の將然の格の下につゞきて推量の意をあらはすなり。

かたみこそ、今はあだなれ。これなくば
忘るゝときも、あらましものを

この「あらまし」の意は「あらん」といふ意にて、かたみといふものが、なまじにある故に、つねに思ひ離れ難し。もし、この形見といふものが、無いならば、さすがに、忘るゝ時もあらうにと推し量り想像したるなり。

さはいへ、このましは、専ら「む」の意の上に、嘆息の意、或は願望の意を含ませたる如き意をあらはすに用ふる助動詞なれば、かく推量の意をあらはすと共に、自ら、その中に願望嘆息などの意をも、何となう兼ね含むがやうなり。

なほ、此のましは後に云ふべし。

べし。　この助動詞は、

將然	終止	連用	連體	已然
べく	べし	べく	べき	べけれ

と活動して、動詞につゞくるには、その動詞の終止の格に續くるなり。唯、良行變格のみには、連体の格につゞく。例へば「有りべし」と云はずして、必ず「有るべし」といふ如し。

山のみなうつりて今日に逢ふことは
春のわかれをとふとなるべし。

この「べし」は、元來、やゝ断定の意もあるものにておのれさきに断定助動詞の所にいふべきを落としたれば、次の回のはじめに、あらためて述ぶべく、なほべしの意には、他にもさまざま申すべき品こそあれ。



東海紀行（承前）

故人　井上通女遺稿

明石を過ぐる比、風すこし和らぎぬ、今宵の月影、いかにゞをかしからむと思ひながら、漕ぎ行く舟の率波なれば、

所がらさぞなこよひはあかしがた
つきにぞをしむふねの率波を

かれは、淡路島と、人のいふを聞きて、

時しあれどけふみて過ぐる淡路島
あはれかけても思はざりしに

申の刻ばかりに、兵庫につきぬ。まだ、日も高しと云へど、唯今行ど、しはむかひぬとて、碇を卸して泊りぬ。聞きなれぬ浪の音も、恐しくあはれにて

乘レ寒一葉浮、　倏忽過二他州一、　風響驚二鄕夢一、
波聲動二旅愁一、　蒼々天與レ水、　浩々月如レ流、
枕レ袖蓬窻裡、　不能只自羞、

十八日、兵庫を出で、午の時過ぐる比、難波津をゝけふころみつの浦に着きぬと、悦びてあがりぬ。爰に、かれ殘りたるよしなめりと、人の云ふを聞きて、

冬がれのけしきもよしや津の國の
難波わたりははるならねども

と、戯に、ひとりごちて、乘物して、やどりに入りぬ、君の御宿もあづかりて、父の友なる人、こゝにものしたるなど、出できて、何くれと、父に、もの聞ゆ。かれ是、聞きつけて、多く來れど、暇なく暮らしつ。關所の御しるし、給らんとて、爰に、二日ありて、二十日の未過ぐるほど、河舟にて上り、さしひく棹も、牽波も、いとまなしと見ゆる物から、のぼりかねたるならひなれど、二十一日の晝頃、淀まで、辛うじていたりぬ。

夜もすがら棹さす舟にさへられて
まくらのしたにむせぶかは波

伏見へまでと期しけれど、あまりに、舟に詫びて、淀より上りぬ。それより、鳥羽にかゝる。秋の山を過ぐとて、

いたづらに過ぎぬる秋の山おろし
音もはげしくなりにけるかな

鳥羽の戀塚にて、

停レ駕猶憐戀塚前、　貞名勒レ石草芊々、
若人自是再難レ得、　天命如何使二渠然一、

夕べかゝりて、都に入る。木草のいろまで、心からにや、めづらかに見渡さる。東寺より、いかなれど、雁塔のははひ、ひとりさやかにて、名に高さも、げに、ことわりと見ゆ。つれ〴〵しく立ちならべたる家どもの、軒のつまうるはしく、出入る人も、れのれ〳〵と、ほこりがに賑しきは、をさまれる御代のさま、云ふも更なり。三條河原町といふ所に宿りぬ。こゝにも、また、御家のあづかりいできて、何やかやとねぎらふ。かなた人のもの、ことづて、馬、人などのことといひて、まぎれくらしつ。知れる人、かれこれ來て、かゝるついでに、物見など、いとよきことなりなど、そらの風と、ゆくさき多く、心は、思ふ方にのみ先ちぬれど、かゝる旅路にて、さること、いと、心も、のどかならじ。まづ、このたびはなど云ひて、赴かず。それも、ことわりなれど、かゝるついでも、いとかたきことなれど、はいなしなど、かしがましきまでにいふめり。二十三日、朝ぼらけに、京都を立ちて、粟田口に出で、瀨田の橋を渡りて、行く〳〵見る、草津を過ぎて、石部とかや、里の名さへ、むつましからぬ旅寐ぞ、いとわびしきや。けふは、逢坂の關も過ぎぬといふ。

へだて來しふる鄕人をこふる夜の
　夢地はゆるせあふさかのせき

二十四日、五更に出で行く。殘りける月、いとさやかに、乘物のすだれに映りたるも、目なれぬ事なれど、いとあはれなり。

鷄鳴旅店役二行裝一、殘月含レ寒映二曉霜一、
長路漫々何日盡、朝々暮々是他鄕、

水口より、土山を過ぎて、鈴鹿の坂を越ゆ。雪氷に、道なめらかにて、馬も、人も、わびしげなり。

鈴鹿山ゆきざへふりぬ我がこまの
　　黒かりし毛もかはるばかりに
あらし吹く谷の岩まにむせびつゝ
　　おともすゞかの山かはのみづ

二十五日、また、夜深く出でぬ。たいまつともして行くに、大路は、はくれに、雪、今もふる。二里ばかり行きて、夜も、ほの〴〵と、あやしき家のかきさへ、いとをかしとみゆ。このもかのも、たゞ白妙なるが、朝の光にまじはりあひたる、たとへんかたなく、我が世の外にゆく心地す。古郷にては、稀なる雪と、めづらかなるものから、ずさの足もと、いかにさゆらんと、いたはしくて、とく晴れよかしと思はる。巳の過ぐるころ、雪やみて、日、華やかに射出でたれど、道も、いと〳〵かわきぬ。皆々、喜びてゆく。申の刻すぐる程、桑名より、船に乗る、暮れかゝりて、星の光、あざやかなるに、黒き雲、むら〳〵たゞよふ。人々、此のわたり、風吹けば、危しとて、空をみつゝ、こがれ行く。或は、何事も、いざしらず、たゞ、人の、かく云ふを聞きふせり。風もいでこず、いとのどかにて、子の時ばかりに、あつたに着き、やがて、物したゝめなどして、やどを出で往く。まだ、夜深ければ、何方も見えず。なるみ、矢作などいふを聞き過ぎぬ。夜明けて、いと、よく晴れ渡りたるに、昨日の雪にやあらん、むかひなる山の峯々、いと白く見ゆ。八橋は、爰わたりと聞きつるにといへど、ともなる者ども、さうけたまはりしは、一里程、あなたに、澤は、はたけのやうになり、柱、杭ばかり殘りて、杜若も、いづちいにけん、ゆかりの色もなければ、御覧ずべくもなしといひしが、聞きしぞかあとこそ、猶床しけれどれもへ

ど、斯くいへど、見ずして過ぎ行きぬ。岡部を過ぎてくるほど、竹のある下に、幼き子ども、集りて遊びゐたるが、いかゞしたりけん、獨、はなれてなきゐたるを見て、

うま節もまだしらなくに竹の子の
　よくとは何をなくねなるらん

赤坂にとまりぬ。うちとけねられざりけれど、

ふしわびぬよひ／＼毎の宿かりて
　ゆめもむすばぬ草のまくらに

（未完）

またぬ青葉（承前）

故人　香川景樹

二十五日。此あした芳子の許より文あり。歌も今おもひいでん。

二十六日。

二十七日。今日嘯月尼きとぶらひて、のこしおきける文いとくた／＼しきや

とじの君去年の冬浪華に在して、重き病に罹り給ひ、年暮れて此木屋町に歸りましぬとは聞侍りながら、おのれも去年の名殘未だいえたち侍らねど、如何に／＼しとのみ思ひまゐらせやる程に、かくれさせ給ひぬと聞きて、驚きまどひしは更なり、今は現身のからをだに見受けまほしく、且つ去年の秋、人の嫁君となり給ひし一人子の君、此日頃はこなたがちにかへ居まして、我にもあらず身をも心をもつくし給ひけんが、いふ甲斐なき世を如何になげきふし在さんやなど、思ひ痛みまゐらせやるものから、其夜しも岡崎へ引とり給へりと聞侍りて、如何にともせん方なかりしを、又此川

ずらに立歸り給ふと聞きて、さきの日まゐりとふらひ侍りて、何くれかなしき事ども聞侍る中に、なき君のいと苦しき下に、世をさとり給ひ、御覺悟ありし御歌など、うけたまはるにも、常の御心のねきどころなめりと、ありがたきものゝ、かなしさ言はん方なし。大人も御物語のうちに、從心は鬼にし給へど、御目の涙あまりぬるを、見まゐらすに、胸痛くふたがりて、なきとこにねん君ぞと言へるふることども、更に身にしみ侍りし。法の御號かいつけ給ひけるを、朝夕拜み奉るとも後の世思ひしられ、淸き道にぞ在しますらん。水を觀じ給ひしも、こゝにてをはり給ふ過世にやとれもひたまへしらるゝも、いとたふとくなん。

なきたまのこゝろにかけし鴨河の
なみのねとこそかみたなりけれ

二十八日。故大納言の君（藤原均先卿）の北の方より、みたまものありて、

すぎし頃より、かねて輕からぬ事のやうはうけたまはり侍りながら、かくたちまちに、空しうきゝなし侍るべきものかは。更に打驚かれて、現ともれもひつき難く侍るに、そこの御心まよひは、如何にとも聞えわずらひ侍りしほどに、春さへ今日明日になり侍りぬる日數の程のねこたり、いとゞ聞えさせやらん方なくなん。

花鳥にまぎれぬ君がかなしさを
慰めかねて春もゆくらん

この北の方は、彼の御陰にまとひなれ給ふまに〳〵言の葉の道にもいと深う入たち、花に月にあくがれかはし給へるも、はなれ給ひし後は、世をおぢきなく見わづらひ給ひて、北白河の西なる田中の里に、

露舍といふをむすびはなれて、せきいれらるゝ水の心もいと清くすみなし給へり。わが岡邊よりは、やがてはひ渡らんほどを、二年三年に、一度二度とふらひまゐらせて、いつもうと〳〵しき罪の數を、せめさいなみ給へるを、さりがたうわび聞えまゐらすのみなん、きはまりたること草なるはかしこくもいと意の外なりや。二月のなかばにも、かの包巳がいたはりを、とふらひ下されし御文の中に、おのが上をさへればしいたみて、

されどとて春めきかねし大空は
君がこゝろの通ふなりけれ。

此御かへりさへえまだ聞えまゐらせやらぬを、今日しもひとつにかたじけなみ奉りて、

ふたすぢに落つとはすれど涙川
なき世ありし世いかれざりけり。

夕つ方例のさうぐ〳〵しきに、いつもの人々來つどへるまに〳〵、見るものにつきていへる歌、多田あきら、

今はとて春もとまらぬ庭見れど
よそはかなしの花咲きにけり。

なほよし、

とゞまらで人はすぎゆく世の中に
こゝろながくもさける藤かな。

ちか子、

空しくも殘るくしげのます鏡
うつらぬ君が影やこふらん。

二十九日。詣でゝ今日もつく〳〵と打まもりをり、ちひさき草葉の生出でたるを、つかの上に見つけたるもいとかなしく、ぬきすてゝよめる、

よゝを經て後こそ草の原ならめ

かげ今よりも見ゑ渡るかな。

宰相中將の君、正親町三條實義朝臣 少將の君、花園公燕朝臣 御兩人より御とぶらひの御文あり。例のかしこし。

いつとてもをしむらめども此春の
くるゝは如何にかなしとおもはん。

こは少將の君のなり。大原にすめる玄如法師來れり山路に咲けりとて、藤の一ふさもてきつ。

ゆきかひに人のめでけるふぢの花
をりてぞ來つる君が手向に

さて讀經しなど終りてよめる、

青葉をも待たずと言ひし言の葉を
聞かずや如何に名殘あらましを。

こは包子が青葉をも待たぬと打嘆きたる時此法師來合せて、君のみか花見る事は誰も皆な、どよみかへして慰めしことを、思出せるなるべし。（未完）

井蛙小錄（つゞき）　井上頼文

田中茂景が身まかりしをかなしむ詞　藤井高尚

別といふもじは、おほかたもゆゝしう、うたてある中に、よみぢの出たちころ、ことにをしくかなしくは有けれ。されど、いみじう年老て、久しくわづらひなどしたるは、おしきながらに、すこしはおもひのはるけ所もあめるを。田中茂景が、こゝろと身をなくなしたるは、さらに世の常のたぐひにはあらず。をしとも、かなしとも、あさましともいはむかたなかりけり。此人は、はやうより高尚がをしへの子にて、歌をなむこのみてよみける。さながらに、をり〳〵は來とふらひて、たいめむもし、文をもつねにかよはして、むつましかりけれど、ことしむつ

きに、江戸にものすとて旅たちけるをりも、わざと使さして、おのれも守のともして、ほどなくかしこにまうでむとす。君のかへさの道にやあひまゐらせむと、いひおこせけれど、われはしなの路をかへりしかど、えあはざりき。さて京にひさしくとゞまりて、大宮につかさ位を申したまはりて、よろこびをりける頃しも、ある人のきたりて、いとめづらしき事こそ聞侍りしか、君がさとのちかきわたりの人とか、田中なにがし、遠江の國みつけといふうまやにて、はらきりてうせぬと、人のかたり侍しといふをきくに、むねつぶれてよゝとなかれぬ。

ことわりのよはひと思ふひとだにも
さらぬわかれはかなしきものを

ものゝふのわざのうべ〳〵しかりしかたをぞさるものにて、ものまめやかに、なさけふかゝりしことゞもなどおもひ出るに、大かたの世につけても、をしうあたらしき人なりかし。としもいとわかくはあらず、よろづとゞのひて、こゝろおきてのかしこかりつれど、しかこゝろと身をうしなひしもふかき故ありし事とぞおしはかるべき。さて國にかへりてきけど、めづらしき世がたりにして、みなひとのほめあへるは、なきうしろにも、おもたゞしき事にぞ有ける。されど、すべてものゝふの、ことゝあるをり、すみやかにはらきるを、よきことゝするは、みだれたりし世のならはしののこれるものにて、よろしきことゝをおもはれず。そもつかふる君のため、かならずしかせでは、いと〳〵あしかるとき、あるは、しぬるにまさるおほきなるはぢにのぞみたらむをりなどは、こゝろといのちをうしなはむもさることなれど、それだに、みづからはしかせでよけむと思ひ

とりて物するも、おもひのほかに、かひなきいたづらごと丶なるたぐひもあるを、とりかへさなくものならねど、いのちはをしともをしきものなりけり。まことやこぞのふゆ、茂景がもとより、椎の木を五もとほりておこせけるを、庭に植ゑおきたりしに、かへりて見れど、はやうみなかれにけり。

生ひたゝむ蔭をまちつる椎の木も
　　あはれむなしくなりにけるかな

この頃かきをはりたる消息文例は、をと丶しの冬より物しそめしを、かのひときゝて、いといたうよろこびて、其の書なりなど、とくみせてよと、いひおこせけることの、いまはかひなくなりぬるも、いとくちをしかりけり。

なきひとの心のこせるふみなれど
　　おのがものからかたみとぞ見む

か丶る別のかなしさも、ほどふれど、うちすぎる丶事のあるならひなるを、ことにふれて、あはれとおもひ出づることのみ、月日にそへておほくなり行くは、其のひとからなめりかし。

賴文曰。文詞平淡にして、よくその狀態を寫せりみだりに粉飾をほどこして眞を失ふもの丶比にあらず。

久米幹文翁の婦女論

永石德文

こは翁のまだ世にありしほどに、さる女學校の卒業式にまねかれて、そこにてよみあげられし祝詞なり。今はなき人になられしを、このごろしきりに、ありし世のこと丶も思ひいでらる丶に、せめてはかきのこされしものをだに見て、心はるけて

んとて、これかれくりひろげて、見もてゆくに、こは女のうへのことにて、翁の持論の一班とも見つべきものにて、えうなきものにもあらざめれど、かくはとり出でつるになん

をみなへしの一時をくねるといひけん昔はしらず、今の大御代は、萬とゝのほりて、男はいふも更なり、女も物學びせぬものぞなきや。けふはしも姬君たちのこの學校の高き級を學びをへつとて、さる式場をまうけて、證書を授けられぬ。かゝる事は、よのつねなるだに、花やかなるを、ましてかしこきみかどの、御しりへの政きこしめす　皇后宮のふりはへておはしまして、見そなはし給ふなるは、いかにかたじけなく、おもたゞしき事ならずや、さるはひめたちのつねに、いそしみつとめて、才のすぐれたればこそと、人々はほめのゝじるに、おのれいさゝかことざまなるほぎ言をまをさんとす。いでや今の世の中、よろづに外つ國の手ぶりにならひて、女は男におとらぬものとて、立居ふるまふさまより、物いふけはひにいたるまで、ためかしくなつかしき事はなくて、あら〳〵しくのみなりゆくめるは、ありこし我國風にもたがひて、うたてしきわざなりや。むかし紫のおもとが、日本紀のつぼねといはるゝばかり、才はすぐれながら、打見るには、物をもはかばかしくえいはぬさまして、少しも才がりたるさまは、みえざりきとなん。おもとがみずからかけるものにも、なま學におりたちて、いさゝか思ひあがれる心に、かたき書のこゝろをいひしろひて、男をもこらしめ、眞字をさへ點長にはしりがきて、ほこらしげなるなとは、えせものゝしはざなりと、おとしめたりき。昔だにかゝるをまして、今の世のちりにそま

ぬは、いとかたきわさなから、さるふしをたてんをこそ、まことの女とはいはめ。當時もいへりしごとく、萬まめやかにうしろみて、公私につけて、をとこの思ひあまれる事をも、いひあはせて、かひなからず、幼き兒をも、つきぐ〱しく、はぐゝみ立たらんに、家に國にこよなきいさをならずや。さてもおだしく、なづかしきさまは、紫のおもとのごとく、みやびかに優れたるさまは、清原のおもとのごとく、德も才もかねたらんが數あらはれ出たらんには、この校の光のみならず。秋のみやまの高き大御心にも、いかによろこばひ給はしまさん。けふに御式の庭の花やかにして、うれしきあまりにかくはまをするなん。

謹慎なき美しき女は
金の環の豕の鼻に在るが如し

烈女百人一首（その二）

橘の家主人

中將姫

まれに來てとふもさびしき松風を
　つねにや苔の下にきくらむ

中將姫は横佩右大臣豐成公の女なり、三才の時母におくれ、人となりて繼母の妬ふかく、讒せられて雲雀山にすてられ、今は世になき母の上を歎きて此歌をよみ、こひしたふあまり、丈にあまれる緑の黑髮そりおとして善心尼とよび、後あらためて法女といふ、供養のために蓮の曼陀羅つくらむとの思ひをおこしけるに、少女來り糸をそめ、老女來りこを助けてその望をなさしめ、さて後二人とも雲にのりて立さりき。これ佛菩薩の淨土より來迎し給ひしなりけり。かくて寶龜六年四月十六日といふに、年二十

九にして母の後を追ひぬぞろ。今思ふに、佛菩薩の來迎といふこと疑はし。こは三寶の奴ととなへさせ給へる天皇の御宇のことなれど、佛敎の極めて盛えたりし時なるをもて、かにかくいひはやしゝものなるべし。そはともあれ姫が繼母にすてられて、右大臣家のやごとなき家に生れながら、からきうき世をすぐしゝこと、今おもひても涙の種なりや、その母を慕ふあまりに今の母にうとまれ、すてられ、飾をおろしたるなど、かゝる人の口によりてころ、この歌いと尊とけれ、今のえせ歌よみといふきは、徒らに言葉てにをはの末に趨り、所謂血なく涙なきもの、思ひても思ふべきなり、苔の下なる母この歌をきかば、いかに悲しからむ。いかに傷ましからむ。

熱田縁采女

いまはとて別れゆくとも袖ふれし
のきのしのぶも吾を忘るな

縁采女は尾張國熱田にて由緒正しき人の子なれど、父母はやく世を去り、伯母の家に養はれしが、いと貧しくして餓えなむばかりなるに、わが身は如何にともならむなれ、身をすつとも一つは育まれし恩にむくい、一つは兩親がなき跡のとぶらひをも賴まむものと思ひなりぬ、その頃、駿河國芦原といふ所に大蛇すみて、犧牲を供ふることあり、この人買、わが里に來れりときゝ、みそかにゆきて金三千疋に身を賣り、その金子に文をそへ、鬢の毛をきりてかたみにのこし置き、今は出たゝむとしてこの歌をよめりかくてその場にのぞみけるに、日頃念じ奉りける熱田明神の加護にやありけむ、異人いできて蛇を退治し、事なくて終ることを得たりとぞ。

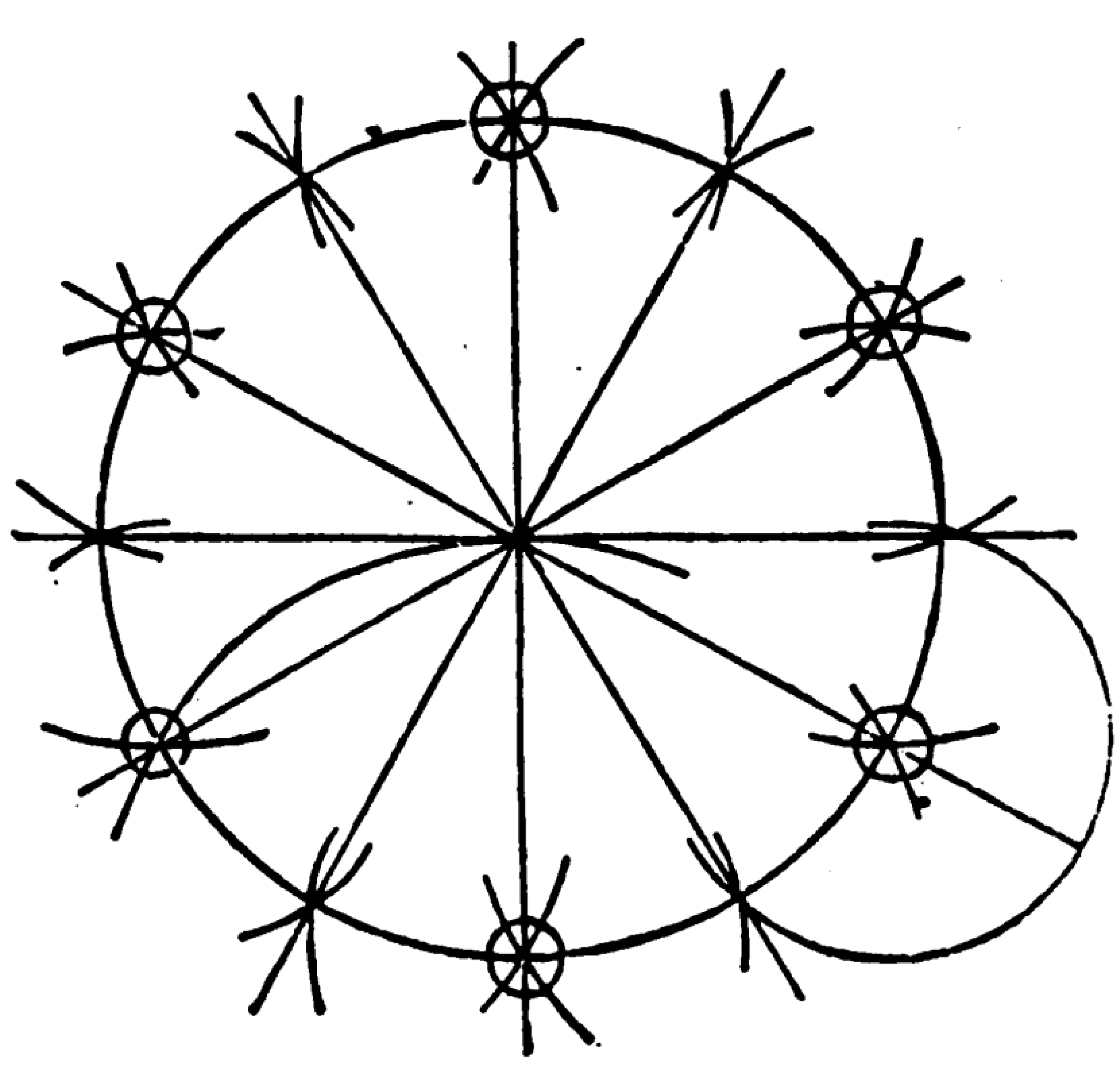
今思ふに、親に仕ふる心は、伯母に仕ふる心ともな

り、伯母に仕ふる心は、神に仕ふる心ともなる、これけだし、わが國神代ながらの道にかなひたるものといひつべし、未だ親に仕ふることを知りて、伯母を蔑するものあるをきかず、未だ伯母に仕ふることを知りて、その祖の又その祖なるわが大神等を敬はざるものあるを聞かず、こは歴史的に習慣的によりてなれる結果なるべし、さてこそ神人想應じて、身は死地より救はれつるなれ、われを忘れざる軒のしのぶは、いかにうれしとこの孝女をむかへたりけむ今の人の目より見れば、死せむとまで思ひ定めたらむには、なほ他にとるべき行爲ありしなるべしと思はむ、されどそは十世紀も十五世紀も昔なる人を律さむとする言にはあらざらむ、われは假りに身をその世におきて、中々にその志を憐むを辭せず、見よ開けに開けし今もなほ、親のためにうき川竹に身を沈むるものあるを

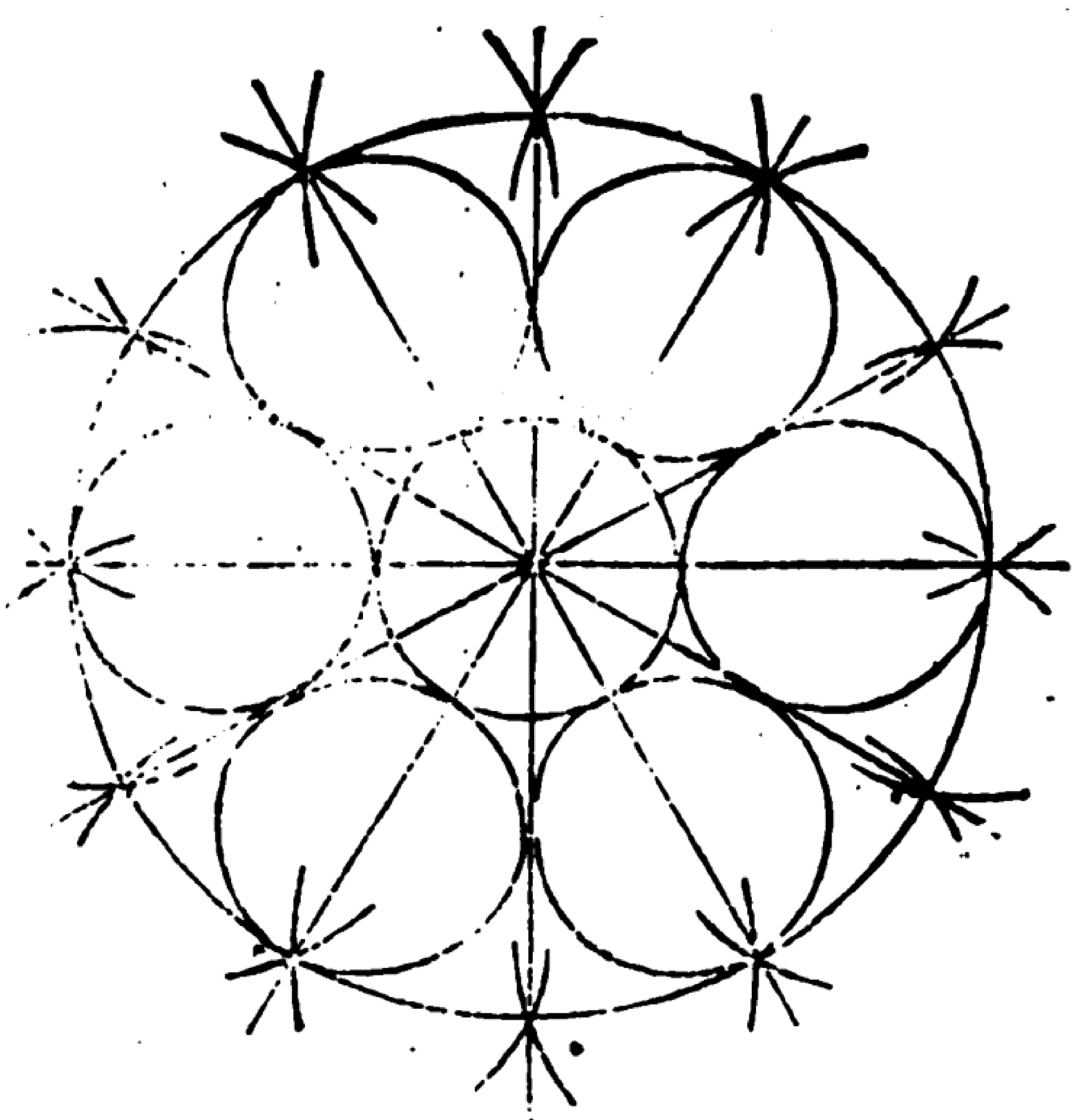
紋帳圖式綱目（六）

井上頼文寄贈

六つ物　但し十二の割

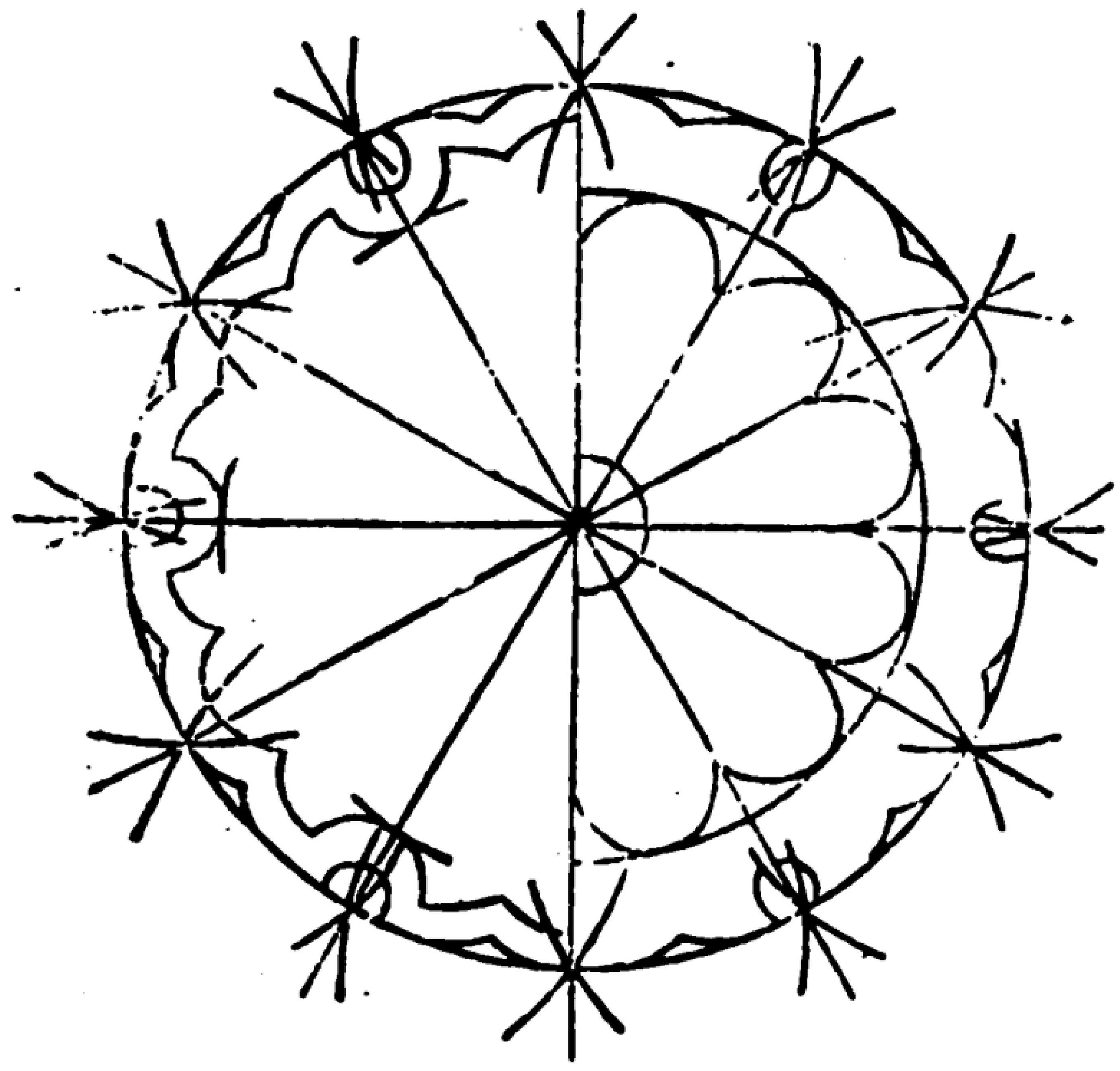


七つぼし

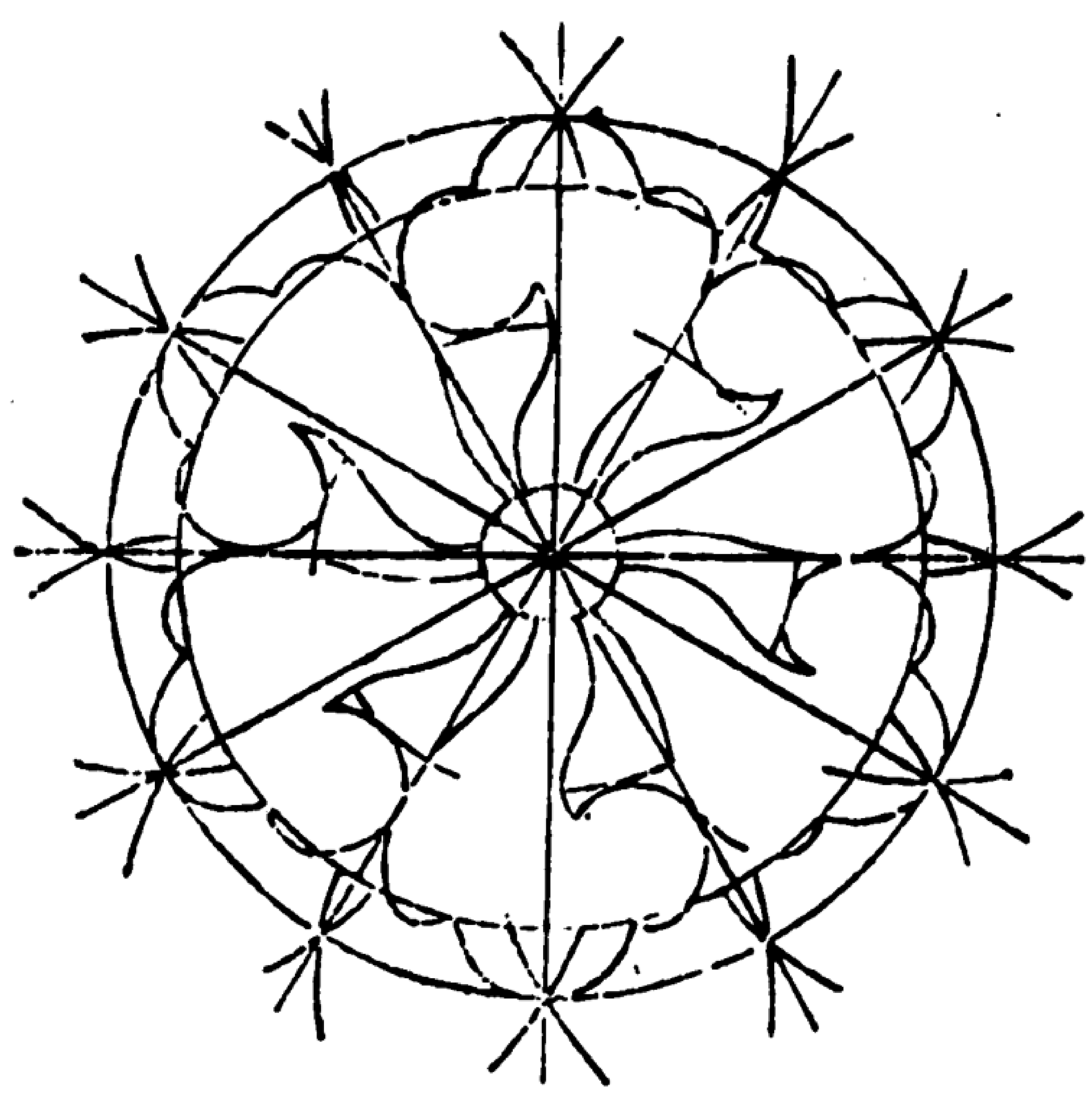


雪輪

はつれ雪(ゆき)

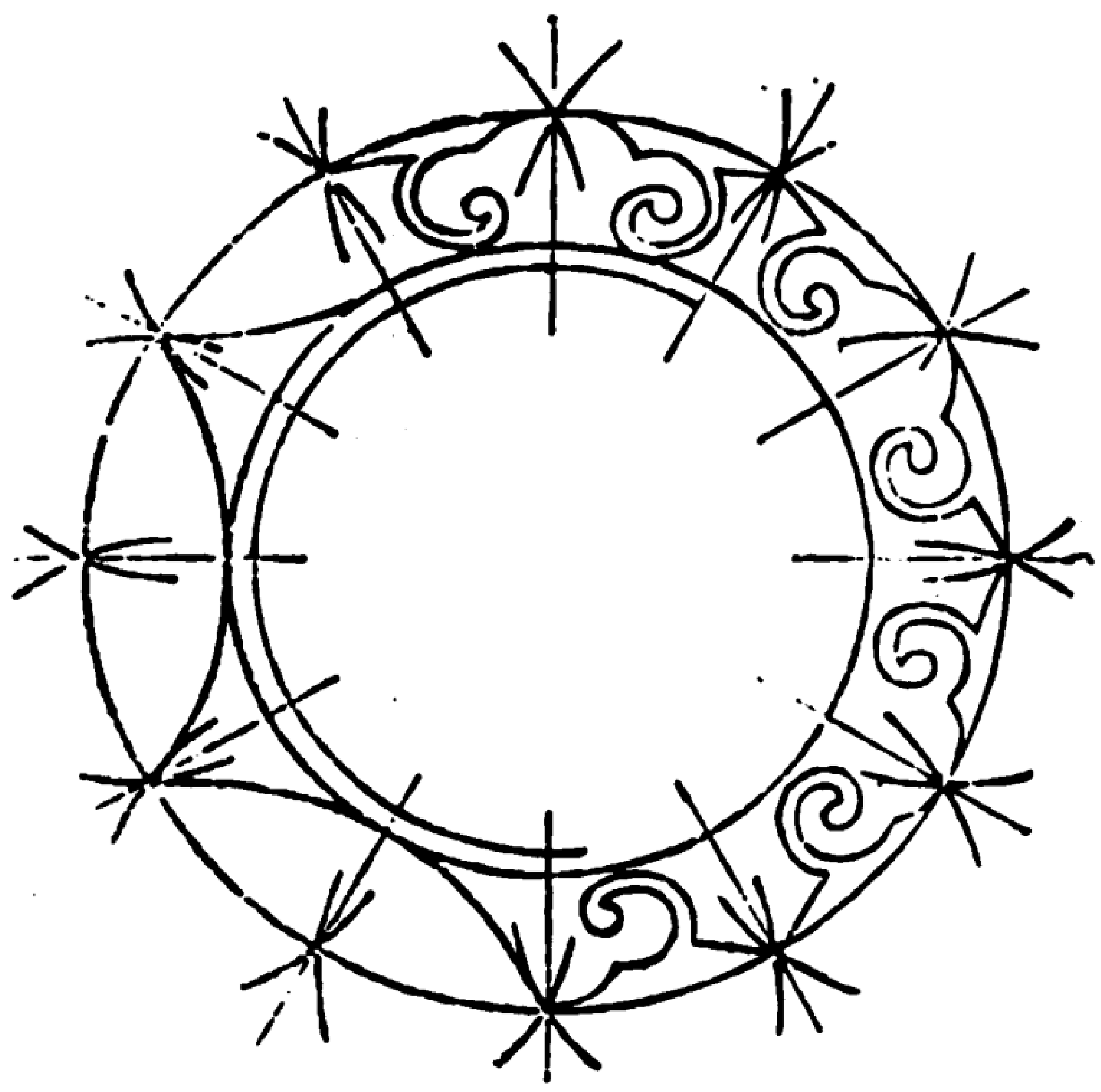


てつせん

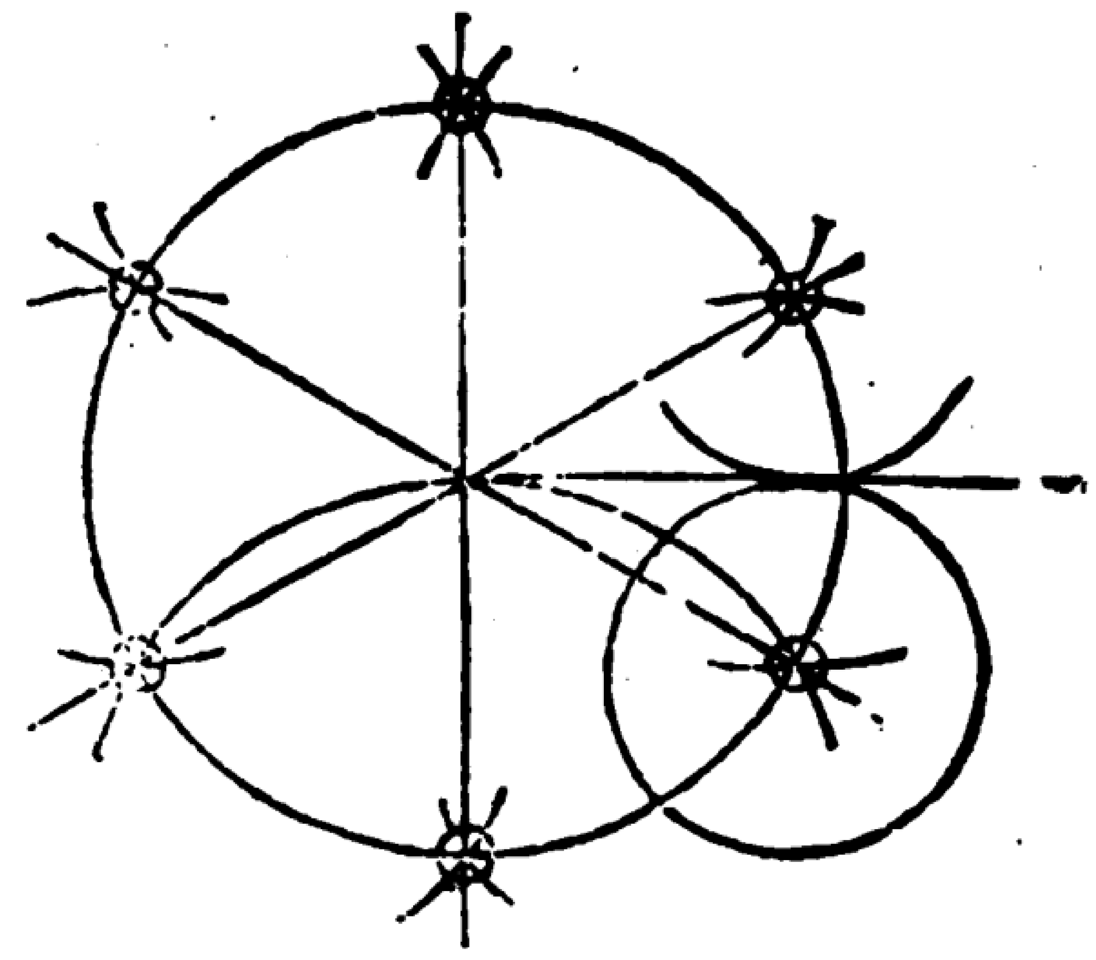


けんくるす

まりばさみ



この類は圖の如く割るなり、但前に畫きし三つ物六つ割のあひたくを兩方より割るなり。割りかた此如。



國語學につきて

光風生

國文學に身を委ねつゝあるもの、今少し、國語の普及と振張とを企圖せむの精神はなきか、世には往々縣居の遺墨と聞けば心動き鈴屋の手跡と見れば神亂れ、徒に古の文學者の遺物を玩弄して、之を骨董視することは知るも、親しく此等學者の著述を研究し、新鮮なる學理を適用して以ちて、國語國文の隆興上、大に發揮するところなきが如き者あるは如何にぞや。露にもあれ。英にもあれ。獨にもあれ。彼等が他國を併呑するは、先務めて、自國語を他の國民に學ばしめ、而して漸々自國化せしむといふにあらずや、國語てふ者が國家の興亡消長に關するや斯の如し。國語思想の普及せざるは尤憂ふべき所あらずや。然るに世の國文學者國語思想の、未國民に普及せざる今日に方り、或は漫りに急激なる國語論を唱へ、或は漢字全廢論を唱へて、喧々囂々その底止する所を知らず、却りて國民の思想を攪亂せしむ。是所謂、本を忘れて末に走る者也。猛省一番せよ。

年魚

ちまた

春はみなろたに高く大きなる巖をこゑ、瀧なせる山川の早瀬をのぼる、あはれ其勢いかばかりぞ。さてもゆく方にわたる巖早瀬の目に入らぬは、高嶺よりも高き青雲の志あるによりてならむ、何ぞ少年の春に似たるもの多き、あるかなきかの其骨柔かに、見ゑすくが如き其鰓きよく、人はみな淵にのぞみ瀬にたち、爭ひてまづ得むことをねがふ、秋になりて身も老ひ、又のぼりし道をたどりつゝ、れし流されてさらばひ下る、その感果していかに、さても得るところは何ぞ、銹これのみ、何ぞ失意の秋の如きものさはなる。うべなり、心ある人の膳にのぼらぬこと、人は釣りてこをよろこび、われは得てこを悲しぶ、よろこぶは是か、悲しぶは非か、年魚ならではよもしるものあらじ。

方言

故人　田宮橘庵

京師のこと葉に、物の價を尋るをナンボといふ。何程の轉せしもの歟、むかしふるく云ひ來る歟。謠曲の安宅が辨慶が詞にいかに強力は、汝が笈を負はるゝ事は、なんばう冥加も無き事にてはなきか、と書けり。京都にては、イクラといふ。幾なり。日本紀に出たり。また、京にて斯うしたサカイ、戻つたサカイ、なぞゝいふをぞ、東都にて、斯したカラ戻つたカラ、といふなり。歌に「ふくからに秋の草木のと詠まれたれど、吹さかい秋のとは詠まれず。畿内の邦言つたなし。音聲に都鄙の可否ありて、言語に夷洛の隔なし。

(橘庵漫筆一名東牖子)

鹿鳴草

故人　貝原益軒

八月に花をひらく、萬葉集に榛、又芽子花ともかけり。俗に萩の字をかく。もろこしの詩にみえずといへども和歌には多く詠せり。或曰はく、花史に天竺花といふは是なり。はぎに數品あり。木萩とて、古枝より葉生じ花さくあり。冬は葉をちて、春又茎より生ず。又別に一種春根より新しく茎を生ずるあり此の事袖中抄にもみえたり。庭にうゑまがきとすべし。一種宮城野はぎといふあり。その花尤うるはし其の茎冬かれて春新に根より生ず、甚長茂す。しげく植うべからず。年々根をわかち植うべし。しげりやすし。或は又一種より、一茎をそだつるもよし甚大にしげる。又一種花紅にして夏至の比花をひらく。又白萩あり。(花譜)

東京廿四景(十)

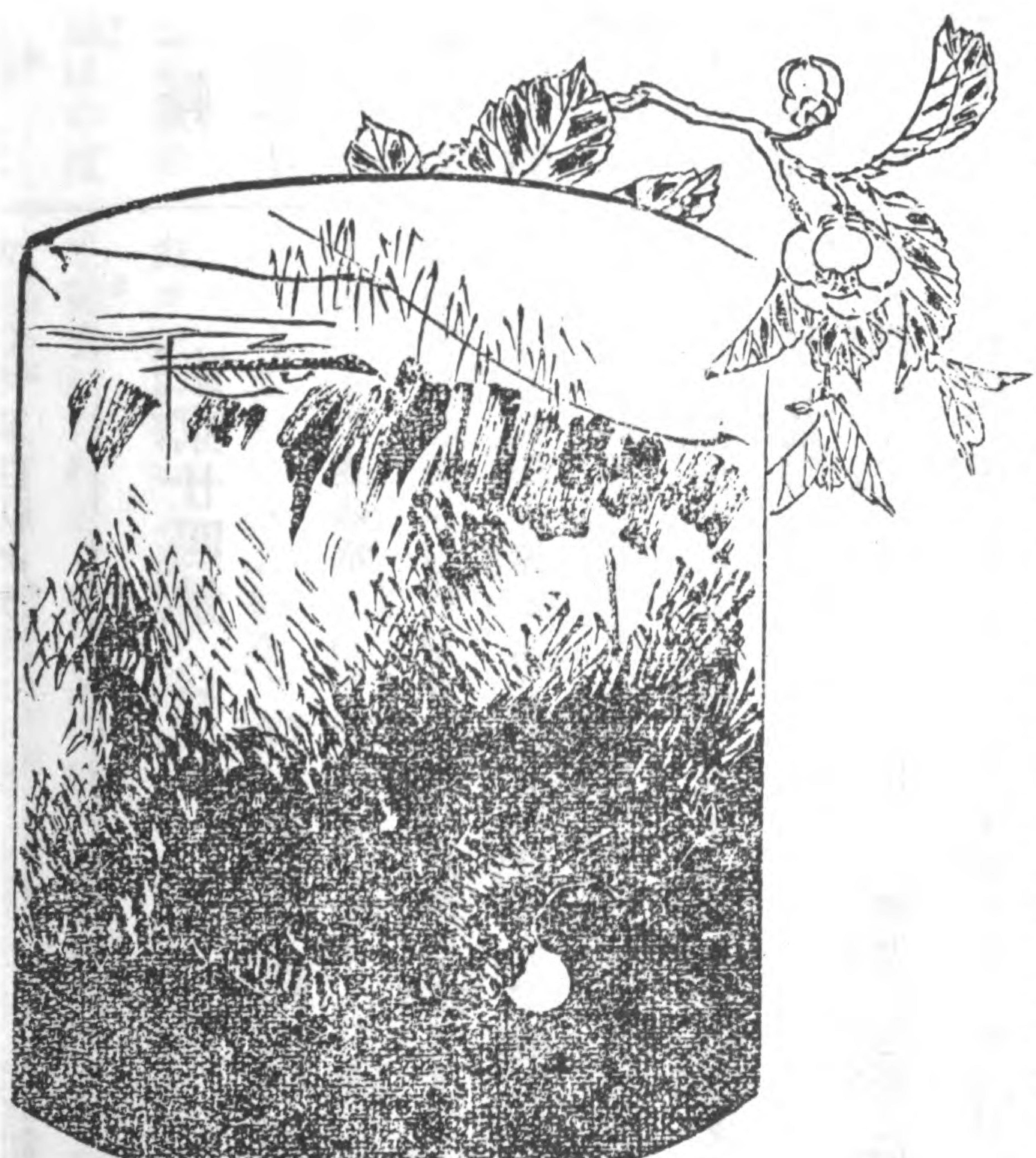
蓬生屋女史

お茶の水

誰か古へに汲みそめたりけむ、お茶の水とは、水道橋より万代橋へ渡るあたりの堀にて、神田上水の樋かゝれり。其處をば昔人の仙臺堀と云ひしとは、仙臺侯、過失のありし時、そが償に此の堀をほらせられし故なりとぞ。

また斷崖千尺、水落ち、石出づる赤壁の風景に似通ひたれば、漢學者は、小赤壁と稱へて、めではやししと云へり。駿河臺の麓打ちかすみて、日影ほの匂へる春のあけぼのはさらなり、あたらしきむしろ敷

きたらんやうに芝草生ひつらなれる土手に、若葉、青葉、水枝、さし枝の陰ふかき底に舟をうかむせ、すゞみとる夏の日、楓にはあらねど、土手の榎の木、岸の皁莢等の葉、もみぢにたぐへて、紅こく水をまでそめなし、妻木などつませたるいかだしの袖にちりかゝる秋の夕、いづれ、をかしからぬはなけれども、冬のいみじう寒きあした千歳の松が枝、高くも、みぎは低くも、一面にしろきものゝふりうづめたるに、ゆく一條の水のみ綠をのこせるなど、とりわきてゆかしきながめなり。俯して清流に臨み、仰ぎて富士山を望む景色、たとしへなく好きに、きくもやんごとなき聖堂ゞは殘りて、木立ものふりたり。昔の校舍のあと、今は高等師範學校、女子高等師範學校、高等女學校など、いらかをならべて、ゆきかふ袂もなつかし。三



四年前、萬代橋と水道橋との間に水鐵橋さへかゝり

て、ゆきゝに便にしたるが、御茶の水と名に負へるも、いとゆかし。

朝露（つゞき）

柳子
櫻子

（其五）

さなきだに吹く風は、こゝろよき夏の初め、水枝さしたる木々のみどりの、露もしたゝる計りなるを、はげしくひゞく瀧のいぶきの顔のほとりをかすめて飛び行くすゞしさ、人二はれのづから足のはたらきもはやく、池近き東屋の邊に至りぬ。

信雄「君少し休んで行かう。

武雄「僕も非常につかれた、サアー腰かけやう。

信「君は足よりも脳の方がつかれるんだろうナ ゼッテこともないじやないか、めづらしく勉强しないとれもふと何か考へてるんだもの。

武「いかにも君のいふ通りだどうしたんだか、此頃は國にゐた時の事ばかり思ひ出して自分もこまつちまうのさ、日本の軍人がこんなではこまちまとれもふのさ……けれども又實地に當つたらどうかなるだろうよ。

信「そうだけれど、其心は養生してれく方がよからう……さぞれもしろいだらうネー怒つたやうな波風の荒い海上に、平然として舟をのりまはし、又は敵から打出す、彈丸が大つぶの、雹のやうに、とんでくる中に、優然として兵卒を指揮するなどゼうだらう、君。

武「僕も餘りそう思つたもんだから、今も其夢まで、見ちまつた、マー聞き給へ、モー其時僕は少尉候補生、身上れかしいには、候補生のくせに、二番分隊

士さ、されど學校を卒業してから、初めての遠洋航海丁度大平洋の中央あたりに來ると、さア起つた、どうじやはげしい大風、マストは折られ、スクリウもやぶられちやつた、其時僕はまるで半狂者、汗をながして、一生けんめいはたらいた。

信「ウヽされから。

武「さうするところに、當直の水夫が一人走つてきて、二三メートルさきに、何かながれて來るといふんだ、こりやア不思議と思つて、アーク燈を照して見れど、日本の小船に人がのつてゐるやうなんだ。

信「いよ〳〵ふしぎだ、早く話し給へ

武「もうよろう、そのさきは又君に笑はれる種だから。

信「いゝじやないか笑はんから話したまへオイ君。

武へ――

信「だうしたね。

武「マアーそんな事はどうでもいゝから、よく考てみると實に人間は果ないもの、元より軍人は國の爲に、死ぬるのが本分だが、一寸敵の爲にやられたらもうそれつきりだ………が、しかし君有難い事には、この招魂社に神として祭られ祭にはかしこくも　陛下御自身御敬禮をなされるんだ、何と名譽じやないか。

信「實にろうさ。

といふとたん、ゆくりなく二人は顔を合せぬ、あら不思議や、互の目には時ならぬ露をやどして木の間をはれし月の光きら〳〵とかゞやけり、帶にまきつけし時計の九時をすぎしに驚き、二人は急ぎ立上がり、黄金の小波打よする池の岸に沿ひて、茂り合ひたる櫻の木かげに二人はいつしかみえずなりぬ、

れぼろなりし月はやう〳〵澄みのびて御宮石燈籠。さては鳥居のかげまでを、明かに地上に引きぬ。涼みにと來りたる人も次第に歸り行きて今はその形だにとゞめず、只落ち來る瀧のびきけるに世の中の靜けさを破りて聞ゆるのみ。

朴平（八）

白魚女史

くや〳〵とまつのくるしさの、やう〳〵に去りぬとれもへど、また一つ、新らしうなげきの數を加へたる朴平。今夜ばかりは、とやかくもつくろひたれど明日は何とせん。何とせど、かたくるしき若殿の心はとくるならむ。日來、早う迎へ玉ひてやとすゝめ參らせし折、いつも〳〵、いらぬ事とのみ仰せはし給ひしかど、さはいへ、まのあたりにあひ見給はゞあながちに、つれなく、よそにのみはればすまじ、如何に深山幽谷の氷とおちたる谷川とて、あたゝき春風にはうらどくるときくものを。たとへ野の花、山の花よのつねのあだなる色には、そまらせ給はずとも、二葉よりゆかりもふかき姫子松、御庭近うながめられど、流石に千歳の契りは、あだには思ひ給ふまじと思ひし事を、思ひきや、今夜のさま、明日は何とせん、何として御心をとかん、とかでは人にあぴん道もあらじと、さま〳〵思ひつゞくる老僕の心のいたはしさ。さらぬだに老いては、ねざめがちなるものを、心もくだけはてゝ、つゆ夢もむすばず。彼方此方思ひわづらひ、思ひわび、とがたとなく思ひたどるがまゝに、一夜はいつしかあけて、臥戸にをるもわづらはしけれど、あまりに早うさわぎて、人の目をおどろかしては、よべも遲かりしものをとさる事にまで心をつかふ老僕、床の上に起き直りた

るまゝ、つく〳〵と思ひながむれど、彼方には、早や書齋の窓ひきあぐるれとす。つねに似ず忍びやかなるは、さすがに心をかねたまふならむか、かくては思ひなほしもしまたひてかと、耳ひきたつれど、書箱の音こと〳〵として、やがて繙くか、はた〳〵ときこゆる響は、朴平が心には、さながら今日も亡者の苛責にと、魔王の朝戸あくるむかりの心地して、胸も腸も引き裂るゝ思ひ、しばしは涙にくれたるが、やがて、きつと思ひさだめけむ、さうの手にかき拂ひて、起ち上り、靜かにふすまあけて、行く方は文雄が書齋。見るより早く、そちは今少し休み居れよとの文雄の言葉。聞くより、老僕の心はまたむせぶらむ。さむかりにやさしくおはす君にありながら、末幾むくもあらぬ老僕に、何とてかくはもの思はせ給ふ。いねも休みも、さる事は、此の六十年、七十年の毎日毎夜、飽きたることに候。それよりは、若殿、今日むかりは伯母御前方と心よく語り給ひて、御たびのつかれなぐさめ上げさせ給ひてよ。この老僕をあはれとればさむ、朴平をかなしとし給はゞと涙をもろ手にうち拂ひざま、仰がぬむかりに頼みつゝねがひつするさまのいぢらしさに、さすがに文雄もあながちにつれなくもうちすてがてけん、わかりたり朴平氣づかふなとやさしき一言。朴平は死出の闇路に彌陀の聲かけたまふむかりにうれしく、ればねず膝うちすゝめ、若さま嬉れしく候きゝたまひてか、この朴々の朴平が、若さま、必ず若さまと、泣きつ、笑ひつ、くりつ、かへしつ、なほたのみきこゆるに、文雄はをかしく、うち笑みて、もはやわかりたり、あんじなせそ、早う今一度いねよ、今朝はおそくともよきとて、朴平をたゝせたるあと、老い

ては、げに愚痴になるものやと獨言ちて、笑うてまた押し直る机の上には、讀みさしたるプラトー氏の哲學書感情の世を離れて肉體の快樂を捨てゆくこそ靈魂の誠の快樂を得む道なれとの下に、紫の鉛筆もて、今しも線をひきたるあと、あり〳〵と見ゆ。

朴平がいぢらしきたのみに、さすが心強くもいらへかね、あんじなとは答へはしたれど中〳〵にうちとけたる樣子なく、よく〳〵むづかしく書齋にひきこもりて、百代親子と、とかくにへだゝりがちなる文雄、娘もはづかしけれど傍にもよらねど、流石に母親は心輕く、折り〳〵は書齋にれとづれて、古へよりの事々話しかけても、彼方は十度に一つの答へもはか〴〵しからず、さまたげな、心なと云はんどかりのけしき。さりてもあまりと朴平にうちかこてど、巳が罪として、わびごとの氣の毒さ。娘に聞ねんも、また、せまき心に思ひも一入にあまるらんと思へど、これにもゝらさず。何とてかどかりにかたくななららん、さし出でゝ、つれてしをれとしめてのわざにか。されども、かねても結びしことのなきもの〳〵、強ちによりも合せもせんと、れしてのわざするにもあらず。親の言葉にはいか〴〵なれど、學者の家守らせんには恥かしからぬ女子、ましてふりわけより君ならであぐべきものはとさへ、結びたるものを、あまりと云へど聞ねぬ文雄の振舞かな。もし此のまゝによそにすてられてとあらど、そやこそと父の御叱りはれろか、娘のかなしみはさることそならめど、ひとり案じまどふ母親の心げに我が子よかれとの親心やすむ方やなからむ。

母樣何とては御歸りのさどかりはれろき。昨日も一昨日も父君がむづかしき貌のみせられて、きつうい

からせ給ひてなりと、百代の妹の千代子といふが、父の小言に云ひよせて、巳れ母親をまちかねての手紙。いつまで居りしとて、文雄はかたくなるばかり朴平は心づかひまさるのみ。娘のみをれかんか、反りてあはれと見る事もやと、母親は思ふまゝ、一日文雄に向ひ、此處にまつも、國元にまつも、まつは同じ百代の心ならむに、朴平も老いては來にたり。さのみは勞はり知らぬににたり。はき清めの手助け夜のもの、ひるのものゝあげ下ろしは、彼れに云ひつけさせ給はゞとて、御ことの勉強のさまたげにもなるまじければ、百代を、今より此處に添へまゐらせむ。むづかしげなる書の物語の相手には所詮かなはざらんも、よのつねの御用ならば、人なみははかりとり候はんに、遠慮なく仰せ付けられ都の禮義も敎へ給ひてと、文雄にも聞え、朴平にもあつく何くれと後見をたのみ。歸るときゝて、心細げになみだぐむ娘を叱りつけ、いつまで母などをしたふぞ、さやうにいつまでも子供氣にては此の母は何とかする。隨分心をつくしてむつまじく、青柳の糸のやさしくかしづききこえて、より〳〵には、此の母にもうれしきたよりきかせてよと、心を鬼にして母親の歸りさりたるあと、百代の心細さは如何ばかりなるらむ文雄は、百代ももろともに歸りてあれかしと思ひげ床の上げ、下げ、はき、清め、心のかぎりまめだてど文雄はよろこびもせず。なるべく見ぬやう語らぬやうに、はては、その人の聲する方、影うつる方にはなるべく遠ざかるやうすれど、百代は一入にこもりがちなり。朴平はかゝるさま、何と見るらむ額のすぢの幾すぢか加はりたるを見てもくるしさは知られけり。


松亭



文雄、書にのみ夢中なりしが、流石に、煙草やはしかりけん、傍のサンライスの包みとりしが、はや袋ばかりにて、煙草はなし。いつもならば、朴平たいぎなれども、たのむ處ならんを、よべば百代のこんを恐れて、そのまゝまた讀み出でたれど、さすがにはしかりけん。机の引出し、書箱の底、彼方此方と尋ぬるやうなりしが、やがて、うなづきて袂に手を入るゝは、いつぞや春野方へ行きし折りのが殘りあるを、思ひ出でしならん。さぐる手さきにつまゝれて、白菊のしぼれたる花一輪、何思ひけん、そのまゝしばらくうち守りたり。

さらぬだにはづかしき娘心、百代はうちとけぬ人の傍にはべるもいとゞはづかしければ、心してつとめよと母親にさとされし言葉、心もあつくいれし煮花面もあつく忍び〱て書齋へ持ち行けば、彼方は例の如くみもせず、其方へおけよと、ふりむきもせぬそぶり。いづくまでつれなかるらん。





文林

秋雨　東久世通禧

秋もはや夜さむになりて板ひさし
そほふる雨のおとぞさびしき

山路霧　久我建通

岩根ふみたとるやまちの夕まぐれ
まきのはしのき霧たちのぼる

山影寫水　毛利元德

雲かゝる峯のすがたを間近くも
このやま澤のみつにみるかな

故鄉擣衣　壬生基修

あはれにもきこえけるかな故鄉の
淺茅がすゑにころもうつこゑ

名所菊　池田茂政

さは川のきしのしらぎく咲ころは
吹きくる風も香にそにほへる

田上雁　黑田長知

八束穗のかたぶくつきに小山田の
をしねかり金なきて來にけり

谷菊　水野忠敬

あしびきの山わけゆけど道もなき
谷にさきけりしらぎくのはな

海上雁　黑川眞賴

浦ちかくなりにけるかな塵はかり
沖に見ゐてしかりのひとつら

雲外雁　宮地厳夫

雲のゐるひらの高根に見ゐろめて
かた田に落つるかりのひとつら

秋旅行　鎌田正夫

小鳥なくやまのさゝ栗こぼれけり
ひろひてゆかん旅のなくさに

述懐　諏訪忠元

ひとすぢに歌の林にわけいれど
猶ふみまよふわかこゝろかな

草のもとに鶉をり　三輪義方

うづらなく聲もをり〳〵きこゑつゝ
のべのくさむに秋風ぞふく

閑居虫　柴田靜榮

露ふかきくさのまくらはよもすがら
ゆめのうちにもむしのねぞする

妙喜尼　佐々豊水

堪へしのぶこゝろのかゞみ織布の
長く世にころたゝへられつれ

中野小竹　仝

なぎなたの光するぞくうちふりし
すがたをしきひめかがみ哉

題しらず　安齋篤敬

秋の夜の月さゑわたるにはの面に
虫もあはれを知りて鳴くらん

暮秋虫　木庭芳香

あさち原またきに冬の空見ゑて
かれ〳〵殘る虫のこゑかな

名所秋　仝

秋たけて音羽の山をこえゆけば
紅葉のかせにちらまくをしも

大村兵部大輔の銅像を見て　松本操

日の本に光りそへたる山櫻
香はしき名をかけてあふかむ

秋月入牖　石原均

ねやのとをさしもねられぬ光哉
をすのひまもるわたら月夜は

河邊紅葉　鈴木伊摩吉

秋ふかく紅葉はいろをうつせども
渡れば淺しやまかはのみづ

故郷月　宇井正夫

かくばかり荒し軒ばもうとみなく
むかしのまゝにすめる月影

岡紅葉　蜂須賀隨子

岡の名の忍ぶとすれどもみぢはの
こがるゝ色はかくれざりけり

茸狩　前田朗子

思ふどちあらそひながら秋の香を
あさるあさ路ぞ樂しかりけり

秋晴　柳原愛子

ふじのねに初雪見えてさやかにも
澄みわたりぬる秋のそらかな

瀧邊紅葉　小池道子

ひとすぢの瀧をのこしてあきの山
なへてもみぢになれる頃かな

羇中山　松平健子

昨日けふ山よりやまをゆくたびは
きこりの外にあふひともなし

河邊菊　北島以登子

もみぢ見に舟よりゆけば山かはの
　水にうつれりしらぎくのはな

菊　保科節子

見るたびに色香もまさる心地して
　さかり久しききくのはなかな

菊盛　日野西廣子

仙人かまきけんたねかきくのはな
　さかりと見るも久しかりけり

曉更月　下田歌子

有明のつきこそのはれぬはたまの
　よぎりはれゆくやま松の上に

秋眺望　三宅龍子

秋の日ははやたちたれど星が岡
　さやかに見ゆる遠のやまのは

秋夕　諏訪晴子

夕くれは草葉の上になくむしの
　こゑのあやさへ淋しかりけり

題知らず　鹽井ふく子

人ごとはげにたのまれじ難波江の
　れなじ草をぞよしあしといふ

阿佛尼　林ゐい子

ゆくりなくわくかれ出し十六夜の
　月よりたかく代々をてらせり

秋山家　行友常子

山里の夕くれことにかなしきは
　遠山寺の入相のかね

雨後紅葉　清水靜子

佐保山にしくれの雨のけふふらば
　いまひとしほの紅葉なるらん

樵夫

露月

あかつき告ぐる庭つ鳥、　さほ音のみして天地は、
しづまりはてし大空に、　きらめく星の影すごし。
手斧のこぎり腰のべに、　ましも身輕く柴の戸を、
出るしりへに賤のめは、　「哺待れ」さぞ呼ばふなる。
「忘れまさずやかれ飯を、　藥も身にやそへましゝ」
微笑てゆくしづのをを、　み送る妻ぞあはれなる。
岩根きれたち踏さくみ、　棘からだちかりそけて、
さりも通はぬ深山べに、　分け入る賤やいかな鬪。
柴木にあらで巳が身の、　きらるゝ如き寒けさに、
斧執る腕もひゐこほり、　指落ちぬべき日やあ鬪。
黒金ならぬわがはだの、　燃ゆるが如き夏のひに、
鋸にぎる手もこげて、　いさ堪難き日やあらん。
見るも危きたにのそこ、　底をはる〳〵見下して、
空にそびゆる岩の上に、　攀る折もやありなまし。
青々澄めるかたふちの、　すごき面わをみ渡して、
たかくましづる梢にも、　登る時もやありなまし。
浮雲なせるたのしみを、　樂しむ人のこゝろには、
歎きこるさや思ふらん、　しづやまがつの生業を。
藤のかづらに束れたる、　山なす薪を身におびて、
夕べの杳路たどりつゝ、　今こそいそげ門のべに。
足のおさなひきゝつけ、　そよさ領くしづのめは、
「待ち詫たりやわが夫」さ、　溢るゝ如きそのゑまひ。
塵にまみれしむか脛を、　拂ふをの子のかほの色、
白波ならでうれしさの、　波をたゝへて入りく也。
ひるの疲もなしほはす、　頭なき卓をかたらひて、
妻がそなへのにごり酒、　三たび酌むらん五度も。
今は赤らにゑひにけん、　思なげなるやまがつの、
笑ひさゞめく聲音のみ、　戸ぼその外にもりく也。
變る世もなく盛もせぬ、　この樂を身に享けし、
樵夫の身こそ尊さけれ。　世にも浮きたる富や何。
眞玉白たまうづたから、　横山のごさ積めりさも、
なほかへかたき樂は。　これぞまことの賤なる。
人目も綾にうるはしき、　花こそ風もふきあへれ、
匂だになきみ山木の、　緑ぞさはにたのまるゝ。

秋の末つかた故郷へかへる人におくる歌

海上壽子

山ゆかば、朝霜おきて。　野をゆかば、夕露おきて。
山邊には、紅葉匂はむ。　野邊には、菊やかをむら。

露霜に、よしやぬるさも。菊紅葉、たなりかさして。
故郷へ、かへりゆくきみ。さりきつる、錦の袖に、
色なそへませ。

遠砧

三輪義方

相識れる山里人の許より、鹿の音聞きに來ませ、にひ志ばりもかみつなど、いひれこせたるに、さらでも、山べゆかしき頃なれど、空よく晴たる晝つ方より、一夜宿るべき心搆して出たつ。山口分入れど、尾花はうち枯て、野菊咲亂れ、ぬるでなどの、染め始たるが、見ゆるもをかし。入りもて行くまゝに、いとさかしきを、岩根ふみ、葛にすがりなどして、三里がほどの山路、たどる〳〵、來しかど、行き着たれど、日も傾きぬ。山深き處ともいはず、わたりゆほびかにて、湖廣う湛へて、望もいとよろし、萩を結ひかこみて、黑木もて作れる、仮の庵なれど、あたりもの淸う、住なしたる、いとをかし。あるじの翁、いみじうめづらしかりて、何くれといふを、さしいらへなどするほどに、日も入り果ぬ。山陰は暗うなりたるに、水の面は、なほ遠志ろう、みわたされて、薄霧むら〳〵と、立ち迷へるもをかし。時も違へず、啼くなるが、今日しも、いかにしつらん、さりとも、夜はなど、いふ〳〵、湖の魚、山畠のくさびらなど、所からのあるじ、をかしうて、家刀自、銚子とりなどす、何となき物語打する程、居待どかりの月、水に移れるは、うしろの山より、出くるなりけり。霧は山際にかたよりて、水の面打晴れ、榲の影の、黑う移れるも、物すごきものから、心澄む處のさまなり。今やと思へど、盃とりつゝも、耳欹てらるゝに、槌の音とも、定かには、わかれぬほど

なるが、水にひゞきて、絶々聞ゆる、限なく哀に、心ぼそげなるを、いかなる宿にかと、問へど、かの山のあなたに、さいつ年の頃迄は、幽ながらに、繁う聞えし音の、今は唯一所のみぞ、殘れるなど、きくも哀なり。都には、きゝも習はねど、いとゞ身にしむばかりにて、尋ねも行かまほしう成りて、待たるゝ方の聲は、ほと〳〵、わすれにけるもをかし。

蝸牛を見ておもふ事あり

竹園女史

さらぬたに、もの淋しき秋のこのころ、一日二日とふりつゞく雨のおとも、いとゞ身にしみて心ぼそしや。いかて詞がたきもがなと思ふものから、をりをりなきわたる雁の聲ならでは、おとづるゝ人もなし。終日机により居て、文のひもとけど、學なき身はよみわきかたき事のみ多し、現に向ひて筆とれど、文字つたなくて、思ふ半もねかゝずしやゝみぬ。せむすべなさに、端近う出て見るに、まがきのもとに、うすこく咲みだれたる秋の錦さても見よとか、薄の穂にいてゝ、まねき顔なるもをかし。夏陰とたのみし大木の椎の根に、いと小さきかたつぶりの角ふりたてゝ、はひめぐりてありけるが、やがて一尺二尺とのぼり行きて、はては陰高き梢にいたりぬ。是を見て思ひけらく、かく數ならぬ虫だに、こゝろさすことはなし得るものなり、いはめや人にして、いかに愚なりとも、おこたらずつとめまなびなど、文よみ文字かくわざも、人なみにならざらましやは。

かたつむり富士へのぼらはのぼるへし

といへる古き句の心も思ひいてられてかくなん。



雜報

●みゆき　かけんもかしこかれども、　天皇陛下には、近衛師團の機動演習を東武の野に、みそなはしたまはんとして、　去月廿日いでまさせたまひて、上野より滊車にめさせたまひて、幸手驛につかせたまふ。　皇后陛下には、上野まで御見立せさせ給へり。この日宮々殿下をはじめ奉り、諸大臣以下おまた奉送し奉り、御みち筋には、老若男女拜み奉るもの數もしられぬほどなりき。かくて　陛下には親しく演習のさまをみそなはし仝じ月二十三日御還幸遊ばされたり。奉迎として皇后陛下には上野までならせられ、皇太子殿下並に諸親王殿下を始め奉り、諸大臣以下奉迎し奉る。軈て　陛下には、御着輦あらせられ、小時御休憩の上、御迎の鳳輦に召され、皇后陛下御同列、各供奉員御随従申上げ無事御宮城に着御あらせられたり。尚御通輦の道すぢには奉迎の士民みち〳〵て、みな　兩陛下の萬歳を唱へ奉れり。

●仝じく　皇后陛下には、去る月二十九日午前第十一時御出門にて、上野公園なる日本美術協會秋季展覽會へ行啓あらせ給ひ各室につきてつぶらにみそなはせられ、且つ御買上げの事などありて四時頃御還啓遊ばされたり。

れはみめぐみの露かゝらぬ草もなし。こたひも亦ものを賜ひたるは、
和歌山縣へ金千三百圓、　德島縣へ金千三百圓、
山梨縣へ金三百五十圓、

●皇女泰宮殿下の御箸始め　去る五月十一日御降誕遊ばされし、皇女泰宮聰子內親王殿下には、六月中青山御產所より、麻布御殿へ御引移り相成りし以來、子爵林友幸氏夫婦、御養育主任となりて御守立申上げ、心をくだきし甲斐ありて、益々御すこやかにひとゝならせ給ふにぞ、御附きの末に至るまで、畏き邊より有難き御言葉を下されし程なれば、何れもいよ〳〵心を籠めて御幸を願はざるものぞなき。中に取分けて、御腹なる小菊內侍園權典侍には、時々御機嫌伺ひに參殿いたし居りしに去る月二十五日は、早や御降誕ありてより百六十有餘日を重ねたれば、茲に目出度御箸始めの式を擧げさせらるゝ事となり、前日より夫々御準備相成りしが、其式は勿論御內宴の事にはあれども、至極御叮重のものにして、御膳部は總て大膳職に於て承りぬ、當日殿下には正裝の御服を召させられ、林子爵御婦御介添申上げ、御馬車にて御參內の上、賢所へ御參拜遊ばされ、夫より御歸殿後、豫て設けたる御座の間に於て御膳部を差上て、茲に御箸取の式を行はせられしが、御幼心にも賢こく在まして、御膳に向ひ御笑み傾けさせられけれは、御側の者何れも御祝ひ申上げざるはなかりし。殊に　聖上　皇后兩陛下を始め奉り、皇太后陛下皇太子殿下各皇女皇族殿下よりも、御祝ひの御贈物あり、園權典侍にも參殿ありて目出度御壽を申上げ奉りしとなん。

●兩帝の御宸筆　甲府師範學校敎諭佐藤益太郎氏

が秘藏せる、後冷泉院及び、御土御門院の御宸筆と云ふは、先年氏の嚴父が、下總國岩井郷において得たるものゝ由なるが、色紙二枚（後冷泉院一枚後土御門院二枚）に御詠一首宛御認めありて、後土御門院の御詠は實に左の如くなりと云ふ。

玉章の外にも鳥の跡みせて
濱の眞砂に落つる雁

聞く所に依れば、明治戊辰の戰に、下總岩井邊にも脫走の兵士出沒したるその中に、一人の脫兵姿を隱さん爲めにや、處の者の着し居りし簑笠を乞受けたる後、懷中より卷物一軸を取出し、篤くその保存方を依囑して立去りたるが、賴まれし者は左程尊きものとも心附かず、唯深く秘藏しありけるを、佐藤氏の嚴父が、當時醫師として此地に赴き、始めて御宸筆を拜見し、恐惶措かず、遂に其の者より强得て、之を氏に傳へたるものなりとぞ。

●皇太后陛下御乳人の逝去　畏くも　皇太后宮陛下の御乳人たりし白藤の局といふは、　陛下の御降誕あらせられし際より仕へ奉り、嘉永元年戊申十二月十五日　陛下の御入內あらせられし折にも御隨身申上げ、宮中に入りてこのかた幾とせの間、忠勤一日の如く御仕へ申上げし處、明治九年、局は歲六十路に達し、宮中の奉仕も思ふまゝならねばとて、御免を乞ひて自邸にしりぞき、をり〳〵參內して　陛下の御機嫌を伺ひつゝありしに、今年に及び最早八十路の高齡にて、此程よりは、兎角心地すぐれずとて、打ち臥しがちなりしかば、恐れ多くも陛下には痛く御心を掛けさせられ、時々御使、御菓子など賜はりて、ありがたき仰せごともかうむりしが定命如何ともせんすべなく、遂に去る月十四日、

赤坂の自邸にみまかりぬ。されど　陛下を始め奉り宮中の女官等いづれも永き名殘ををしまれしとぞ。尙祭祀の事などは、すべて御手許に於て扱はせらるといふ。局が死後の榮名は永くかゞやき渡るらん。叙に局の略歴といふを得たれど左にものせん。

白藤局は、大和國奈良春日神社の宮司、大中臣西師壽の次女にして、名を定子と呼び、文化十二年九月二十一日に生る、本年八十二歲なりき。十六歲の折、藏人冨田延庚の許に嫁し、一人の男子を擧げし後幾ほどもなく夫延庚死亡したれど、定子は獨り寡居し居たりしに、天保四年十二月十四日皇太后陛下が、故從一位九條關白の第に御降誕あらせられし際入て乳人となり、弘化元年、陛下が孝明天皇の立皇后とならせられし翌年十月改めて御乳人仰せ付けられたり。(元來御乳人に出づるには夫夫格式ありて、上七社即ち上下加茂、八幡、春日、貴舟、松尾等神官の子女以外には容易に出づること能はざる定めなりとぞ。)

定子は今や御乳人に上り、陛下が嘉永元年十二月御入内あらせられし際にも御隨行仰付けられしかど、爾來は宮中の奉仕となり、髮はおさへに結び、白の重ねに緋の袴を穿ち、常に陛下の御側に侍べりしに、慶應三年三月十七日孝明天皇崩御あらせられて、陛下が皇太后とならせらるゝや、定子は中老格仰付られ、維新後明治四年八月二十日官名改まりてより、更に命婦に任せられて月俸五十圓を賜はりたり、同五年、陛下東京へ行啓あらせらるる際、其供奉となり、同六年權掌侍に任せられ、月俸百圓を給ひ、正六位に叙せられたり。同九年定子は最早六十歲に達して、宮中の奉仕も思ふに

任せざるより、辭表を呈して本官の御免を願ひしに聞届けられしが、位階は元の如く賜はり、永年奉職したる廉を以て終身八十石を賜はる事となりたり。然れど定子は斯る有難き思召を銘感し、身を故郷なる奈良に移して、靜に餘生を送り居りしに、今より十年前厚き思召によりて、東京へ召上せられたれど、玆に同女は赤坂區新坂町四十七番地に邸を搆へ、折々參內しゐたりしに、此頃より遂に老病に罹りて危篤に陷るや去る月十五日特旨を以て位一級を進められ、從五位に叙せられしが、翌日八十二歳を以て遂に永眠せり。一子あり光表といふ、富田氏の後を嗣ぎて本年六十二歳なりと。

●齡三百歳の祝宴　明治維新中興の際、皇業を補佐し奉りて、東にはしり西にかけ、風雲を叱咤して錦の御旗に御光をそへ奉りし英傑の數多き中に、今日まで配偶相揃ふて身心健全に、上はかたじけなくも　皇上の御寵愛を辱ふし、下は國民の尊信を受けらるゝは、勝安房伯と佐野常民伯との二人なり。勝伯は今年齡七十四、其伴偶は七十五。佐野伯は勝伯に越ゆること一年にして、其伴偶は今年七十八、此四長者の齡を合すれば三百有二歳となるといふ。世にさち多き人も數あるべけれども、此の二伯二夫人の幸福には及ぶものもなからん。されどにや、佐野伯近日主人となり、勝伯及び夫人を招待し、自邸に於て福壽無量の祝宴を催さるゝといふ、いとめでたき事にこそ。

●女丈夫　女子の武々しくて女德のなきは、まことにいまはしききはみなれど、さりとて又、をゝしくいさましきふしもなくてはかなはぬことなり。此の頃日にまして女子の孱弱に流るゝにひきかへて、

女丈夫こそあらはれたれ。そは去る月二十五日より、京都に催せる、大演武會にて、全國の劍客鎗士があまたよりつどふ中に、兵庫縣の日下秀雄と名のる妙齡の女武者なりけり。秀雄は初め廣島わたりにて名だかき劍客、大谷幸雄となんいへるものと試合をなしたりしが。そも秀雄とは如何なる女史ならんと、皆まちゐたるほどに、徐々と道場に出でたるは、年の頃十八ばかりなる乙女にて、紫の袖を紅襷にて褰げ、白木の偃月刀小脇に抱へ込み、その風采何となう雄々しげなり。相手は荒々しき鬼をもひしがん丈夫なり、頓て互に一禮して起ち揚り、しばしうち合いたりしが、大谷氏の太刀は女史に一うちに打ち落されたれど、みな一度に喝采して、女史の手柄を賞むる聲、山も頽るゝばかりなりしと。是より愛知縣の劍客、池田義勝氏引き換りて女史にわたりあひ、必死になつて鬪ひしかど、手もなく打ち負かされ、その翌日は立花武十郎氏打ち蒐りたれど、是又敗を取りたれど、女史の雄名は忽にして關西に轟き渡りしと云ふ。

●女學生の同盟休校　かくだもいまはしけれど、孃たちのいましめにもとて、左にきゝゐたるまゝをものせん。滋賀縣大津なる私立高等女學校の生徒中、其の寄宿舍に入舍し居たる二十名は、毎日の配膳に供せらるゝ食物の粗惡なるに堪へずとて、かしましく呟き居たりしが、遂に同盟休校を企て、二人去り三人去りて、後廿人の生徒相踵て退舍し、親戚若くは相識の家又は普通の旅宿に投じたるに、寄宿舍は一朝にして空屋と爲り了りしに、校長始め舍監等は余り突然の事に頗る迷惑したりといふ。其次第は、退舍の當日、朝膳には味噌汁と澤庵三片、晝飯

は鮭の小片を供しありたるに在りと云ふ。配膳の如何に惡粗なればとて、かゝろめにも高等の教育をうけつゝある、しかも年わかき女子の身として、教師父兄のゆるしもまたず、己のまゝに荒々しき擧動などするは、惡むべきのきはみにて、聞くもうたてきことどもなり。

●露をだに　いとふやまとの女郎女ふるあめりかに袖はぬらさじ。とよみて刄にふして、身うせにき。といふは、賤しきながらも、心にたつる節しありて我が國風の一節をのこせり。さるを外國には、さるゆかしきふしはなきものにや。このごろ亞米利加のシンガポールといふところにては、白人種の婦人の身のうりかひ盛りに行はるといふ。さるは　セランゴルといふところに住める清國人の買ひ取るなりときく。又近刊の讀賣新聞には、細君の欠乏と處女廿萬人の輸入と題して、左の記事を載せたり。

英領コロンビヤ州にては、年々男子のみ增加して、女子の數大に減少し、隨つて細君欠乏の恐慌を來したれば、此程東部加奈太州より四萬人の未婚女子を輸入して當座の欠乏を補ひし由なるが、係る例は外國にては敢て珍しからぬことにて、今度の輸出元東部加奈太にても、往時婦人の欠乏を來せし事ありしとき、佛國より數萬人の美人を輸入し、又四十五年前、ネヴアダ號は、六百餘名の美人を桑　港に輸入し、五年前には桑港市長が三千人の婦人を募集してテキサス州へ送りしことあり云々。

とほく海を隔てしとつ國の人に買ひとられて、髯のちりをはらひながら、一生をおくるといふこと、よそごとながら、いまはしきわざならずや。

●なごりの花　梅やさくらとつぎ〳〵に、千種の花は咲きをへて、秋の七草もいまは、はやちりはてぬ。されどたゞ古の人の貞節正しとてほめたゞへつる菊ばかりは殘れり。又こは花にはあらねど、もちぢの木々に錦をおりなして、人まち顔なるも床し。さほど寒うもあらず又あたゝかくもあらぬ秋のもなかの好氣節となりたれば、まなびのひま〳〵、菊見、もみぢがりなどに出でかくるもよき慰みならん。菊は團子坂、淺草花屋敷、染井、目黑、廣尾の笑花園、本所の草文など所々にあれど、中にも團子坂は菊細工にて名高し。されど天然の雅致に乏しければ風流の士はこゝよりも、染井、目黑、笑花園などに杖を曳きて眞美を愛するなるべし。さはあれ麗しくて、且つにぎはしくおもしろきは、團子坂にてぞ、こゝは去る二十五日より開場して、各園何れも、菊の花もて飾りし暖簾美しく、幟おしたてゝ客を呼ぶこゑいさましげなり、仕掛の大やかにして最も目にたつ見ものは、植惣の那智の文覺瀧壺の場は最も廣大にして、瀧は悉く大輪白菊を以て作り、廻り舞臺の大道具にてなか〳〵見榮あり。種半の大閻魔は悉く海赤の菊にて造り、閻魔の體上に於て合邦仇討の場は人目を驚かせり。植梅の山門の五右衛門、揚卷助六は美麗にして布引の瀧の場なども好し。植重の三陸海嘯の場は、家崩れ人流れたる慘狀を摸して、浪は悉く白大輪菊を用ゐたり。荒籾も三陸海嘯に板垣伯の巡撿、赤十字看護婦の出迎ひなどあり、大舞臺は婚禮最中のつなみにて一寸意匠をこらしたり。此の外千樹園、高池園共に花壇菊、盆栽菊、鉢菊などを陳列したるが、こゝはつくりばなの鄙俗を避けにやゝ風流なり。

紅葉は、上野、王子、海晏寺、目黒、秋葉、千駄ヶ谷、根津、高田、廣尾の笑花園などにして、上野は僅か十株ばかりにすぎざれども、遠くもあらねばそゞろありきのかた〳〵訪ひ見んも一興あるべく。王子の瀧の川は上野より滊車にて行かばわづかばかりにして達すべし、こゝは瀧などもありて、もみぢもあまたあれど、日曜日の散策にはもとも妙ならん。海晏寺は古へより名高き所なりしも、近きころ火災に罹りて今は若木のみなりといへど、丘の上下數十株の梢〳〵時雨るゝごとにもみぢいやまさりて、一面にうすきこき錦しきつらねたるころは一入のながめなるべく、文人雅客の錦の間をぬひて丘上の碑石など探りあるくもの絶えざるべし。其の外目黒、千駄ヶ谷、高田などみな大同小異のながめなり。

●末松文學博士の講話

婦人の務（つゞき）

ザット申して見ますれど、維新前に於きましても、女子には往々學術文章人に秀て、頗る敏達の人もあつたのであるが、此頃はどうも學問をした人の類が少ないから、偶ま學問でもした人があれど、社會は之に對して奇異の想を爲す樣な情況があり、又當人の方も、俗に言ふ己惚とか云ふ樣なる魔にさされる者が往々あつた樣に承はる、夫れが爲に、女子の女子たる風采が見えない抔と云ふ批評を來たした情況があつたのであります。今日に至りましては、一般の有樣が段々變化して來て居ります、故にさう云ふ事は決して無いだらうと思ひますし、又あつては濟まない譯で、諸君に於ても充分御注意になり、又其の筋の教員方も、追〳〵御注意になる事

であらうと思ふ。兎に角に、類が少ない時には却つて弊は多い樣な有樣であつた、去りながら、能く全躰の情況を考へて見ました時には、前申したる樣に、女子を事業の奴隸となし、或は唯人慾の道具にすると云ふ樣なる觀察のあることとは、天下國家の利益で無いといふことは明かであるし、即ち他の一般の世界の大勢は、追々と女子の敎育を進むる方に向つて行き居るといふ事は明かである。我か國に於ても、今日は追々と女子敎育を進め、女子の好位地の彼岸を指して乘り出したる運びになり居る處で、其道中を致す其の船を漕ぐ任に當つて居るのは諸君の如き御方であると存じます。西洋の事を見ますするに、哲學者の言ふ樣な事でござりますけれ共、亞利加の國風人情の事を、佛蘭西の學者のドクーリといふ人の書いた書物の中に、亞米利加の今日の發達といふものは、全く女子の力預つて多きに居ると云ふ事を言ふてある、是は、亞米利加に於ては女子の敎育其の他が最も發達致して居つて、歐羅巴よりもモットー進んで居る樣なる有樣であつて、是が社會に大なる助を爲して居るといふ事を觀察して書いたのであるが、一個人〳〵に付て申して見ます時には、亞米利加の婦人間に行はれる風俗の如きは、或は餘り度に過ぎて居ると云ふ評論もありませう、又或は婦人と男子の釣合が合はずして、澤山婚姻せぬ女の多い國と、さうで無い國とは、女子の敎育の心得は自から程度が違ふて宜いと云ふ如き論もあつて、他の國では、亞米利加程の事は要らぬと云ふ如き論もありませうが、兎に角、右樣に論じて居るものもありますす、左すれど、婦人の國家の發達に於ける責任の最も重いことは之れに依つても見られると考へるので

あります。

以前は日本でも、一向女子の敎育に付ては、少しも制度といふものは無つた、或は偶まに學問をする人があつても、夫れは重に儒者の娘などが家庭で習ふと云ふ位の事であつた。勿論男子と謂つても、今日の如く學校の制度があつたのでは無いが、是にはそれ／＼學校らしいものがあつたが、どうも女子に専門の學校は無かつたのである。所が御承知の如く、今日に至つては、小學校にも女子部もあり、其他上の方の學校の制度も出來て、女子の學問を研究する場所も追々出來たのである、但し此等の學校に於て敎へる方法といふものは、餘程六ヶ敷いことであらうと考へられます、私も左様の事に付ては、一向經驗も何も御座りませぬから、何とも申されませぬけれども、此の學校あたりも、設立以來既に年を襲ねたる次第でありまするから、進歩致して來るだらうと思ひますが、第一に、學校に行つて學問をする人も、敎へる人も、最も心掛くべきことは、學校は必ずしも唯々智識を得るのみで無いといふ事で、これ丈けは充分に心に持つて居なくてはならぬ事であるかと思ふ。成程學校に行きますれど、文字を敎へ算術を敎へ、其他色々の事を敎へる、則ち技藝智識上に關する事は、主として敎へるに相違ありませぬけれ共、之を學ぶ人も、敎へる人も、餘程注意を要する事であつて、唯々右等の事を知るばかりが決して宜しいといふのでは無い、學校は風儀を敎へる所である、女子學校は殊に左様です、學校に這入つて他日立派に人の妻たる人、人の母たる人、社會に交際をする人と云ふ様なる方角に向つて注目をして、座作進退其他に於て、決して暴々しいことの無い様に、殊に

人に指をさゝれる様な、後闇い事の無い様に、風儀正しく心掛けて行くことが肝要であらうと思ふ。夫れ等の點に付ては、女子の學校に於ては殊に大切であるが故に尚更困難があるであらうと思ふ、夫れで學ぶ人に於きましては、殊更其等の事に注意致して置かなくてはならないと思ふ。

さて又一躰に、女子と男子との關係の事、釣合の事など、社會の事柄に付て色々論究致して見ますれど、色々な事があるでありませう、歐羅巴阿米利加杯に行きますると、或は選擧權も女子に與へなくてはならぬと云ふ論を唱へるとか、或は女子にも色々の職業を頒たなければならぬとか色々議論も生じて居りますが、夫れ等のことは、今日の日本の情況に於ては、未だ必要は無い、勿論之に對しては彼諸國にても大なる反對論のある位である、之を要するに、女子は甚だ申上げ惡い様なる事であり升るけれ共、其身躰の構造の上から致しても、どうしても男子とは同一に行かない場合が多いのである、隨つて或點に付て論ずると、損と言へど損の様なる場所がある、去ながら又他の領分もあるので、其或領分に付ては、女子の方が遙に重きを占める譯でありますから、必ずしも相容れざる所に向つて、詰らない競爭は今日に於ては好む所では無い、又夫れ等の事に心を馳せるのは、却つて不利益になる事が多からうと思ふのである。

（未完）

◎新刊書のしなさだめ

●實用看護法(全)　（東京警醒社書店發行）

こは京都看護婦學校の教授なりしヘレン、イー、フレザー女史がとしごろ敎授に用ゐし手記に、他の

一二の書をとりて、よきはとにものせしを、同し校の教授成瀨四書子が、我が國の語にかきわたしたるものなり、いとよく心を用ゐてかみたるに、文も亦平かにして、解し易し、看護婦は更なり、さらぬきはも、繙きなで、益少なからざるべし。

●保育雜譚ひだち帶卷一　（保育協會發行）

藤田東湖の常陸帶にあらす、姙婦の鎭帶を、いはた帶、または、ひだち帶ともいふより、名とせるなり、もはら鎭帶のことを論へり、既婚の者、及さるへき道の人の見るべきものにて、うらはかき處女の見るべきものにあらす。

●女學雜誌　（四百廿七號）

おとさきはしらず、隨筆欄中「心女」（二）（三）及ひ、雜錄欄なる、すね男といへる人のものせられし「如何か是れ美人」といふ文中には、いかゝはしと見ゆへきふしなきにあらず、女の見るべきものとしては、ふさはしからざるべくや。男女の間のことはいはずもかな、さらでも女として、修むべきわざの、いとおほくて、月日もたらぬをや。とれもふはかりにて、れのかとる筆ならねせせんすべもなし。

●いさゝ川（第一號）　（竹柏園發行）

もはら和歌の上のことをいへり、さゝれ浪といふ欄には、世にきこえたるうた人等の言の葉の花をとりあつめ、藻かり船といふには、大塚楠緒子の、春のあしたといへる新体詩あり、玉がしはといふには、ろゝろ言とて、句讀のことを論ひ、三浦千春翁の「景樹翁の秀逸」「足代翁雜記」佐々木信綱ぬしの「世のすがた」とて、紀中の歌をぬき出られたり、なはつき〳〵記、萬葉、廿一代集、家々の

集、よりぬきいづべしといふ、「言葉の園」には、各評兼題の歌あまたあり「やちくさ」といふ欄頭にきはゝし、「我等の希望は、ふるきあとをきはめて、新しき道をひらかんとするにあり、短歌をいよゝ發達せしめんことをはかると共に、長篇の歌をも、よろこびむかふるものなり。」といひて、歌に

　　ゆき／＼て海とはならんいさゝ川
　　　　人にしられぬなかれなれども

とあるを見む、まつ心がまへのほどは見ゆべし、いとうれしき企なり、かくかきをへて

　　末つひに海とならなんいさゝ川
　　　　とこよの國もたゝよひぬべく

とれはねず、口に浮ふを、をこのわさやと、われとわか口をいましむるに、人はたゞ何とかいはんや。

婦學 裏錦　四十七號　尙絅社
女學講義　第十一卷　大日本女學會
女學草子 なでしこ　第三號　進修社
東京茗溪會雜誌　百六十五號　仝　會

●豫告　次號よりは學園欄に鹽井正男氏のものせらるゝ新古今和歌集の講義を載すべし。

兼題
- 十一月廿日
  - 歌……燈火
  - 文……枯野
- 十二月
  - 五日
    - 歌……冬月
    - 文……寒夜讀書
  - 廿日
    - 歌……都歳暮
    - 文……雪だるま



の庭

十一月五日兼題　紅葉深淺

天　三河國寳飯町下地町　永井さい子

露霜はへたてぬものをもみち葉の
なとこきうすき色に染むらん

地　東京麴町區三番町八十一　櫻井はな子

おしなへて降る時雨にも紅葉では
ひとつ色にはそまらさりけり

人　埼玉縣北足立郡浦和町　靑羽茂枝子

何れをか折りて歸らんこれもよし
うすきもあはれ嶺のもみちは

秀逸　（十五首）

うすくこく紅葉匂へりつゆしもは　磯部都屋子
こゝろ〳〵に染め渡すらん

薄く濃くにほひ別るゝもみち葉は　山崎しつ子
おくれさきたつ露やそめけん

うすくこく色つくみれは世の人の　橫田　秋子
こゝろに似たる紅葉なりけり

うすくこく色つく山のもみち葉は　名取正代子
いかなる霜のわきておきけん

薄くこくもみつる秋のやま〳〵は　館脇ます子
大和にしきもよそならぬかな

麓にてあさしと見つるもみち葉も　吾妻ちか子
のほる高根はふかく染みけり

山姫かこゝろつくしのからにしき　大谷津こと子
こきも薄きもいろのゆかしき

手折り來し山のもみちに比ふれは　香川　潁子
なほ色あさしにはのこすゑは

さためなき時雨の雨やかゝりけん　日高かず子
いそ山もみちむらそみのして

こきうすき後れ先たつわりてこそ　田口しげ子
紅葉はことにめてたかりけれ

こきもわりうすきもわりてうら錦　橋本丹江子
立ちましりたる山のもみちは

こくうすくにはふもみちは山姫の　林　久　子
織りし錦のとはりなるらむ

しくれ雨いたりいたらぬ隈ならし　八太　光子
村こにみゆる木ゝのもみちは

やま姫の手染のにしきうすくこく　田卷ひてよ子
しくるゝことに色まさりけり

村時雨こゝろ〳〵にそめつらん　新開みちを子
いろこきうすき峯のもみちは

(以下原稿到着順)

うすくこくもみちしてけり立田山　住山　幾子
秋のにしきもいまをさかりと

うすくこく時雨の雨やそめつらん　佐々有隣子
門のちちの木のきのはゝろ葉

薄く濃くそみ出る山のもみち葉に　甲斐莊いう子
えくるゝあめの色も見えけり

こゝかしこ時雨は枝をえらふらん　牧野　貞子
まはらにそみぬ峰のもみちは

龍田山かさなるみねのもみち葉に　河田いえ子
れとらて匂ふにはのひともと

蔦のはふむくらの垣もこくうすく　田中　靜子
もみちの秋にもれぬいろかな

こくうすく山のもみちは色つきぬ　野口志奈子
れく露しもはかはらぬものを

さだめなき時雨の雨やそめつらん　粟田口のぶ子
薄くもこくもみゆるもみちは

色あさきもみちは霜をえるやいな　星野かず子
ひと峯こせはふかきくれなゐ

ちかまさりとはれりせぬ紅葉は　星野ひと子
龍田のひめのにしきなるらん

いろ淺き端山のもみち過きゆけは　星野康世子
深山はまさる秋にそありける

うすきこきもみちのにしき春山の　塚口せい子
柳さくらにたぐへてろみん

山のははてりそめぬれど谷かげの　仁保　基子

もみちは今にあをはなるらん

はなとのみ見えまかへぬる紅葉の　花山保江子
くれなゐ色のさま〴〵にして

定めなき時雨にそまるもみち葉は　花山　操子
深きいろありあさきいろあり

薄くこくそめしもみちはやま姫の　野崎　章子
つき〴〵見する心なるらむ

はやまこそ色はあさけれたく山は　瀬戸　榮子
木々のもちの深くもあるかな

夕日さす木ずゑの色はふかけれと　木村みす子
下葉はいまた淺くもあるかな

秋ふけて色にてるまてたつたひめ　長渕餘野子
なと薄くこくそむるなるらむ

しくるれは秋のは山にうすくこく　中山嘉壽子
ぬれてもみちの色ろみえける

こきうすき山の紅葉はいかにして　中山　富子
たなし時雨のそめわけにけん

下染もましる千入のむらもみち　横田須磨子
けしきの杜はあき更けにけり

わけ入れは松のたえまのうす紅葉　小町谷里江子
はかにこかるゝ色をみすらむ

見わたせは木々の紅葉うすくこく　小町谷園子
しくれの雨のいかてわけゝん

薄くこくいと面しろくおれるかな　星野　暦子
紅葉のにしきぬしはしらねと

奥やまの紅葉のいろはまたあさし　萩原　章子
とやまの方はふかく見えつゝ

日にそひて山のすかたも薄くこく　柳田　里子
木すゑ紅葉と染めもゆくかな

村時雨なへてふらねはもみち葉の　諸井久良子
色うすくこく見ゆるやま〳〵

露しくれそむる紅葉はうるはしく　池谷　富子
薄くもこくも色も出てにけり

たしなへてふれる時雨を薄くこく　杉浦　糸子
染めわけてけむ山のもみち葉

紅葉する小倉のやまをなかむれは　石川すけ子
色なはうすきえたもありけり

秋たては四方のやま〳〵紅葉して　植木とよ子
色うすくこくそめ別けにけり

つゆしもに色つく山のもみちむは　高楯とし子

うすきもこくもうつくしき哉

なへて濃く染みなししより中々に　今藤なか子
　青葉ましりておもしろきかな

あさくこくあやにおりなす山姫の　服部かつみ子
　ふかきこゝろをしる人ぞなき

手向山ぬさとたむくるもみち葉の　前澤幸子
　こきもうすきも神のまにまに

こきうすきみねのもみちは山姫の　野中あさ子
　またこゝろみの手初なるらん

小倉山もみち去ぬるときて見れは　田代艶子
　また時雨まつ木々もあるけり

一本のもみちなれとも去つ枝には　田代綾子
　また染みいてぬいろもありけり

昨日まて薄しと見てしもみちはの　谷川清子
　こかるゝはかり染みにける哉

山の端は一むらしぐれそめぬらん　石川るゐ子
　みどり交りの木々のもみちは

もみちせしなかに緑のいろ見えて　石川きむ子
　定めなき世のためしつるしも

見る人のこゝろのいろは深けれど　青木春子
　またはつしほの庭のもみち葉

小倉山のちの御ゆきをまつならん　青羽逸子
　ちしほの中のうすきこすゑは

高雄山もみちしけりと來て見れは　福島貞子
　またそめあへぬ色もましれり

村雨のひとしく染めしもみち葉の　行友常子
　薄くこくなる世にこそありけれ

あきされはきゝに染み出す錦にも　大久保みち子
　深きあさきのたかひありけり

高根のみ時雨降りけんふもとなる　眞鍋直子
　こすゑはいまた色もあさかり

楓やまのはりて見れははるかなる　上條よし子
　ふもとはいまたうす紅葉なる

露時雨ちしほひとしは染めつらん　佐々木千鶴江子
　むら濃に見ゆる紅葉はのいろ

立田姫いろをつくして染めぬらん　勝百代子
　うすきもこきも見ゆる紅葉は

みやこには青葉なりしも信濃なる　萩原しげる子
　木曾山かけはもみちしにけり

いかなれは同し時雨の染めながら　原いち子

枝にむら濃の見ゆるもみちは

村時雨ふりみふらすみ薄くこく　増田すゑ子
染めわけてけり木々の紅葉は

こきうすきみねと麓のもみち葉は　植木鋼子
しくれの雨やわきて染めけん

うすくこくれのつからなる紅葉は　廣田とめ子
神代のまゝのにしきなるらん

薄くこくもみちの色はからにしき　遠山よしゑ子
そめてゆかしきかつらきの山

たつた山ふもとの道はうすけれと　鹽路花枝子
峯はもみちのてりまさりけり

村雨のなとそめわけてうすくこく　北川はな子
匂ふはかりのもりのもみちは

さほひめのはれきなるらんから衣　冬木わか子
紅葉のにしきこきもうすきも

ふもとのみくれなゐ染の色見れは　松岡濱子
峯はしくれのふらすやあるらん

薄くこくきゝのもみちの色見れは　小野田のふ子
秋にこゝろの染めぬ日もなし

山めくるしくれの雨をしるへにて　有坂秀子
目さむるはかり紅葉してけり

こく薄くはゝその森の木の葉さへ　有坂清子
もみつるいろの品はありけり

うすくこく染めにそめにし初瀬山　有坂いそ子
紅葉のたくも紅葉なりけり

うすくこくは山かくれの下もみち　鷹野靜子
いつしか秋を告けそめにけり

紅葉のこきにうすきに見えぬるは　鷹野義美子
秋またあさきすかたなるらん

いろふかき山のもみちにうち交り　小西ちやう子
あさきやなつの名殘なるらん

立田姫そめ分けにけんやまもみち　小西清子
下葉はうすくこすゑいろこし

立田山ふもとはうすくみねはこく　小西こと子
そめし紅葉のうつくしきかな

やまひめのそめのこしけん飛鳥山　青柳桃枝子
峯のあなたはうすもみちなり

紅のなかにはゝそのうすもみち　櫻井りん子
ありてそ秋のいろはまされる

そめ甜し花よりもろきもとつ枝も　久松誠子

　かた枝はうすきもみちはの色

さためなき時雨の雨やそめにけん　松山かね子
　うすくこきなる山のもみちは

つき／＼に其の眞心の見ゆるかな　白石貞尾子
　おくれさきたつ庭のもみちは

薄く濃くみゆる紅葉はやまひめの　深見聰子
　手そめの色やこゝろみるらむ

うすく濃く色こそかはれみる人の　原志津子
　こゝろひとつの峯のもみちは

こきうすき遠近やまのもみちは　岩佐うの子
　織れる錦のこゝちこそすれ

定めなくしくれし雲のおとゝめて　守山比古子
　色もむらこのみねのもみち葉

村しぐれ降り初めてより薄くこく　芦澤萩子
　いろつきにけりはやましげ山

紅葉するあらしの山にきてみれど　小山せき子
　またうす染のいろもありけり

如何にしてをなし梢をうすくこく　及川千尋子
　同し時雨の染めわけけにけん

こゝろして露もそめけん錦なす　一番瀬つぎ子
　みねのもみち葉うすくこくみゆ

十一月五日兼題　徵兵に出たつ人におくる詞

天　播磨龍野　眞鍋直子

今年君には徵兵にあたらせ玉ひしと承りしが、此度数多き中より、殊に撰まれ玉ひて、大前近きまもりとならせ玉ひ、明日はこゝを出て立ち玉ふこそ、實に臣たるもの丶尽すべき道たるは、いふもさらにて、いともえがたきはまれにぞありける、雄々しきみ心に、常々そをのぞませ玉ひしことなれど、御よろこびやいかぞかりなるらん、おしはかりまゐらするに、いと／＼うれしきそかし、なれさせ玉ふまではくるしき事も多かるべけれと、よく／＼たへさせ玉ひて、日頃ちかはせ玉ひし御言の葉のごとく、軍人のかゞみともならせ玉ひ、御自らは申す迄もなく、この里のほまれをもあけさせ玉ひて、めでたく歸らせ玉はん事をねきまつるになん。

地　大坂高麗橋四丁目　山崎まつ子

あなたふとや、このたび君の爲國のために、人の人たる務めをつくさんとて、かしこくも雲井の庭を守る兵士となり玉ひて、鳥がなくあづまへたびたちせらるゝ雄々しさは、目出たしともいともめでたきわざになん、みとせといふ年は長くとも、千歳の弓のつかの間にすぎぬべけれど、うますたゆます、豐さかのぼる朝日の影に、さき匂へる花の如きうるはしき心を持ちて、唐人の神とかしこみ、おぢぬる虎をも、手どりになしたる、日本魂をふりおこして、外國までも、吾すめ神の高きみいづを、かゞやかさ玉はんことこそねがはしけれ、わらはもをのこならましかばと、甲斐なき身をかこつもおろかなりや、されど君を尊み國を思ふ心は、をみなもかはる事なく、ひとつなれど、たゞひなきいさをたて、とく／＼歸り給はん日を、待ちはたる心を、みことはぎまでに一言かくなん。

人

筑前國嘉穗郡飯塚町　廣田とめ子

みくにの爲、力をつくし、み代のさかゐをいのりまつるは、實に我か國民の本分にして、畏くも　天皇の統べたまへる下に、みくにをまもる軍人となると、もとも譽れあることなりけり、されど身弱く、萬たらはずして、志のむなしきも多かめるが中に、人にすぐれしふしもなく、軍人に擇まれ、村人のよろこびの聲のうちにつゝまれ、出て立つけふの君か勇ましさ、心なき野邊の千草も、にしきなす、峯の紅葉も皆君を送るかごとくになん見ゆる、されど、入營せられん後は、なほをゝしき心もてまめやかに仕へ奉り我日の本の軍人たるに愧ちさらん事を、朝な夕な心ろがけて遂には、香はしき譽れを負ひ、美はしきにしきを裝ひて、めでたく歸り來まさんことを、今よりいのり奉るになん。

(以下原稿到着順)

佐々有隣子

草むすかばね、水つくかばね、のどにはあらじと、天皇の御たてとなり、朝夕つかへ奉るぞ、わが臣民の心の柱つきたつる礎になんありける、あはれ／＼、ますら山かつも、あまの子も、徵兵にいさみて出でたつものから、親の親の遠津親の代々に奉仕りし、士族の家に生れ出でられし妾が同姓の兄君よ、ねがひ

てもたやすくは用ひられぬ陸軍歩兵に、年齢とくしびきとを以て、今度の第十二師團に入營をゆるされつる名譽は、兄君の一身のみならず、同姓につらなる妾まで、銃砲はとらねどいさみて、奉送の詞をかくなん、あなかしこ。

塚口せい子

吹く風も枝をならさぬ大御代にも、事あるときの備なさでやは、我大君は、はやくもより、こゝに大御心を入れ給ひしかど、過ぐる年、支那とたゝかひしをりも、後を見せしこともなくて、外つ國々に、强き國と仰かるるに至りしあり、實に有りがたきことならずや、されど、こをもて心をゆるむる如きは、大八州の民のなさゞるところにて、大君にはつはものども數多めしやしなひ、いよゝ備へををこそかにせんと思召したまふころ、いとも〳〵かしこけれ、幼き程、同じ學びの庭にて、皇御國の歌をかなでしは、昨日今日と思ひしに、はやくも年月をかさねて、君にはことしの御めしの數に加はらせ給ひ、程なう御出立のよし、こよなき御ほまれとこそ存じ侍れ、只此後は、ひたすら御みことのまゝにいそしみつとめたまひ、祖のおやより傳りし日本魂を、朝な夕なに磨かせ給ひ、天晴の日本をのことなり給はんことこそ願はしけれ、まづは御かど出の御祝ひにそへて、心のまゝをかくなん。

瀨戸榮子

君は幼かりし頃より、かりそめのあそびにも、軍の事をこのませ給ひきと、されど、先つ年も、日淸せんさう實記てふ書をよみ給ひては、手をうち、かくてこそをのこに生れたるかひあれ、我もとに行かまほしきかな、御國をおもへど、いのちもなどかをしからんと云ひ給ひし事もありぬ、こたびは兼てのみこゝろのようにや、近衞志願兵にて、鳥が啼く東の都にのぼらせ給ふとは、いともをゝしきおほしたちになんありける、殊に近き衞の兵は、恐れ多くも、大君のまもりの爲ときゝぬれど、君の父君母君も、なれどこゝちあるものなりな、雲の上人をけちかく拜むをりもありなんといとゑましけにのたまひぬ、かゝるをゝしき父母の敎の庭におひたちたれど、霜も嵐もいとひなく、雪の中にもいさましくかをれる花こそ君ならめ、あゝいさましのいでましや。

長洲餘野子

合格のかぎりは、只君のため國のためつくさんとれはせ、世間一般の母は、徵兵をいみきらひて、種々のよからざることをたくめど、其はさるものとして、女々しきなきごとにくつはれ給ふな、されどもて、不孝の汚名は猶更とり給ふな、名こそかはれ、孝と忠とはいづれか異ならん、其つくすところの道一つなり、あまり頑固にれもひとりて、片々によりて、忠をつくさむも、孝をいかにせむ、孝のみに從ひて、國のためつくさゞるも、それ忠をいかにせむ、然れど、御邊の御双親は、御性聰明にましませど、さる心がゝりはなけれど、だゞ君がため一命をもなげうち、あつばれ天下に名をのこし後の世までもほまれをあげ給へ、かの原田重吉、かの白神らつ叭手のごとくにてこそ、忠孝はじめて全しといはめ、勵め君、進め君、はげみて其名を天下にとゞろかし給へ、君が勳功の、一日も早くあらはれぬことをまつのみ。

名取正代子

いにし廿七八年征清の擧は、大いに國民の心をはげまして、久しく太平にねむりたる大和魂を振り起し、軍に出つるを願ふ輩いと〳〵多くなりしか、其際、君は未だ齡の滿たざるを以て、軍に從ひ給ふことかなはずとてうらみ給ひつるに、こたびはいよ〳〵適齡を以て、ねらみに當らせられしとかや、君が御よろこびはいふも更なり、御やからの御滿足、そもいかばかりぞや、今や征清の事終ると雖も、他日清又報復の志なしとせんや、加ふるに彼魯英佛獨等の諸國、外に和親を示すも内に爪牙を磨き、以て我隙を窺ふなしとせんや、一朝此事あるに及びは、即ち君等を以て大君の爲御國の爲には、屍は虎伏す野邊にさらすとも、骸は千ひろの海の底に沈むともひたすらつとめ戰ひて、彼西の洋の夷をして、皇國の威風に靡かしめ、日本男子の鑑を示して、再び我國をうかがふ能はざらしめんことこそのぞましけれ、君夫れつとめたまひてよ、よろこびのあまり、拙き詞もかへりみず、君か行を送るとてかくなん。

鈴木昌子

蒸しあつき夏の日も、草木の半ばかれ斃るゝ冬の寒

き日も、馬を練兵場にしらべ、玉なす汗を拭ふにすへなき、或は寒風身にしみ、雪を飛はす日も、いと厳めしく出て立ち、しのゝめより射撃の術を習ひ、或は夜もすがら月にむかひて、營所をまもり、國に大事のあるときは、林なす劍も、雨や霰ととびくる丸も、物ともせす、犯しすゝむは、軍人たるものゝ常ぞかし、男子と生れて、軍人となるも、亦苦しきとかや、さりながら、軍人は國家の杖とも柱ともなり、いともかしこき、大君の御指揮を奉ずるものなり、君には、甲種合格の上、御抽籤にあたり、ちか〳〵に軍隊に入らせらるとのこと、誠に祝ひよろこぶべきことになん、花は櫻木人は武士と、古き言の葉にもありける如く、軍人は、古しへの武士になん、不時の出來事ある折りに、秀てたる手から功名をたてなむ、勳章とやらを、胸にひらめかし、榮ひ進むこと望むべく、又死して、屍を野にさらすも、是れ國のため君のためにして、かぐはしき名は、なかく後の世までもつたはりぬべし、去にし日清の戰爭に勝をしめ、われ〳〵の安らけく暮すも、みな忠勇義烈にとめる、軍人の賜なり、拙なき筆もて、いさゝかに門出の御祝ひまでに、斯くは物し侍りぬ。

谷川清子

くれゆく秋の、何となう名殘をしまれて、梢にちり殘りたるもみぢ、一ひら二ひら吹く木枯につれ、窓にうちかたるもいとさう〴〵しきをりから、君には、こたび徴兵のえらびにもれさせ給はで、みからだもすこやかにおはしまし、大和男子たるにはづかしからぬ體格をもたせ給ふとかきゝくはべりぬ、げにめでたしともめでたき事になん、かゝるめでたき事をよろこぞずぞ、何をかよろこぶべき、かくよきみからだをもたせ給ふも、ひたすらなさけも深き父母君の厚きたまものところいふべけれ、さはさりながら、あすはいよゝ君のかどでときゝぬ、ろをはなむけにと、くさ〴〵の調度をとゝのへたまふれは君のみこゝろやいかに、老路をたどらせ給ふ父母君をあとにして、いで立ち給ふきみがこゝろやいかに、おもひさつするだに、うれしともまたむねふたがる心ちせられてなん、されぞ、しぞしすべてをよろに見て、一あしだにうしろになひき給ひぞ、身を兵役にゆだね給ひしからは、あはれ將官のいふがまに〳〵

ひるはひねもす、夜はよもすがら、身をきたひこゝろをねり、態をたて、忠君愛國の氣を養ひ、一朝み國に緩急事あるときは、一歩もひるまず、いかにけはしき山なりとも、そこひしられぬ海原も、寒天肌をつんざく冬の日も、あらがねとかす夏の日も、厭ひ給はで、すゝみゆき、日來きたひし腕をぞふるひ、あたりのてきをうちたひらげ〆かしこくもわが大君の大みこゝろをやすんじ奉り給はゞ、わが日の本のますら武夫のせめは、これにてたりぬべし、妾もし男の子なりせば、ともに軍籍にいらまくはりす、こころのみはやたけにくへども、女と生れいでし言ふ甲斐なさ、かへす〳〵もくちをしき事かぎりなけれど、妾等をみなでにかはり、畝倍君が身心をきたひたまはゞ、妾幾分のこゝろを慰むるを得んか、今更こゝにくりかへすは、をこがましくはべれど、只忠君愛國の四もじをぞ、ゆめなわすれ給ひて、まづははなむけにかへて一言かくなん。

松岡濱子

うけたまはれは、あなた樣には、こたびの御徵にて、明日はいよ〳〵御出立との御事、兼ねての御

性にしあれど定めて、御滿足の御事と、御祝ひ申上まゐらせ候、誠に八百萬の民草、高き枕に安く眠り候事、ひたすら　皇天帝の、兵備に大御心を盡させ給ふにもとづけるになん、はや一年となりぬる去年、唐の戰、外國人をれどろかしてより、一きはに兵備の要重きをれき候折柄、こ度の御入營、いよゝ目出度遊ざされ、ます〳〵御すこやかに皇國の爲、義勇の玉の緒御つくし遊ざさるべく、神かけて御いのり申上候、先は取りいそぎ、一筆さゝげまつり候、かしこ。

眞能みちゑ子

こたび公の御徵しによりて、近衛の兵となりたまふとて、御うからやから、よろこびくつがへらせたまふ御事、げにことわりにこそ、さても叔父君の、二なきものにいつきかしづき給ひしを、うせたまひしよりは叔母君の身ひとつに引きれひて、朝に夕に、つゝみなう、雪に霜に、すぐよかならんことをのみ願ひて、生したて、まなびの道にもくらからせじとの御心づくし、あだならで、萬にかしこうたちまさり、かつよにも優しき御心のまめ〳〵しさに、重き

荷れろしたる心地すとは、ひごろの御言葉になん、さては此度の御こと、いづれあしとにはあらねどことに畏くも、御門の近き御あたり守り奉らせたまふ事、そもこの上の御幸ひや候ふべき、やがて入らせ給はん後は、大君の御爲め、國の御爲め、兵の道に御身を練りきたへて、さる方の鑑と、もろ人にあがめられたまはんことをのみ、神かけて祈り奉る、さてこそ、亡き御父君の御名も、いよ〳〵麗しく、世のうきふし數へつゝも、いさましくたけきますらを生したてたまひし、御母君の御いさをも、ますます世にいちじるからめ、まのあたり御ことほぎ聞えまほしきを、遠き道の程の本意ならぬまゝに、拙き水莖にことよせて、いさゝか心のよろこび聞えまつるになん、あなかしこ。

田鶴　ひでよ子

こたび、君には召集に應じ、海路はるげき臺灣にれもむかせ給ふよよし、げにゆゝしくもめでたき事にころ、かの國は、氣候風土もいたくことなりと承り侍れは、よく〳〵御注意あらまほしうなん、かねてより齒を切りうでをさすりて、世の有樣をなげき給へる事なれど、今こそ我か大君に盡すべき時きたりぬと、いかに勇み給ひけん、殊に母君妹君は世にまれなる賢女にましませど、君をして內顧のうれいなからしめ給はんこと疑もなし、妾も及ばずながら御留守中のこと何くれとあづかり侍らんに、君はいささかも家の事案じたまはず、兼ての御氣象もて大君に忠義を盡したまひて、めでたく凱旋せられん日を待ち奉る、君がこの勇ましき門出に際しうれしさのあまりたらはぬ筆をもかへりみずかくなむ。

及川千尋子

事しあらば、よしや、かばねに苔はむすとも、せめて堀の埋草にもと思へど、ろれさへかなはぬ女の身の、甲斐なさ。さても男子と生れし人の、羨ましさよ。畏くも、八隅しゝ大君の御楯となりて、國のかため、御世の守と、君には、こたび徴兵に出てたち給ふとか。そをきくにつけても、いとゞ胸のみおどる心地ぞし侍る。まいてれゝし育てし父上、母上との御身には、いかばかり嬉しう覺え給ふらん。人生わづか五十年、思へば、人の一生ほどはかなきものはあらじかし。世に男子と生れたらんもの、わけ

て、日本男子と生れたらんもの、なすこともなく、徒に草木と同じく朽ち果てんこと、いかでかり口惜しかるべき。さるを君には、いかなるさちにてか大御軍のつはものに徴されし事こそ、いと喜びしけれ。事なけれど、劍、太刀、いよ〳〵と心、とぎ磨きて、榮か行く御世のしつめとなり、事しあらど、よせ來る仇波、打ちくだきて、君の御稜威を四方の海にかゝやかし、名をも千歳の後に流し、父母をも世にあらはし給へかし。日ならず、御門出ときくからに、馬のはなむけにかへて、思ふ旨、聞こえあげ侍るになん、なまめしき繰言ゆるさせ給へ。

事しあらばいのち死ぬとも芳しき
　名をば千歳に殘せとぞ思ふ

月前鹿　　河野文子

あつさゆみ入さの山の月かげを
　とゝめまほしとしかのなくらん

亡父のみ前に花を手向けて　　高田滑子

今日はしも手向くる花にれく露は
　なき父まつる涙なるらん

紅葉　　住山幾子

朝な〳〵いろまさりぬるもみぢはに
　くれゆく秋はれもはさりけり

山家菊　　住山せの子

やまさとをすみかとすれは自から
　さける菊さへなつかしきかな

月前雁　　滯口奈保子

月すみてこゑもことさら爽かなり
　更けゆく夜半に渡るかりかね

山木枯　　曾山道子

やままつの梢につきはさえながら
　ふく音さむし木からしのかせ

秋山路　　中島房子

色うせぬもみぢみんとてみやこ人
　わきの山路にたづねいりけり

行路紅葉　　島田好子

みちの邊の紅葉の枝はまはらなり
　われよりさきに人やをりけん

田家初冬　　西村登羅子

よそほひし小田のかゝしの笠の上に
　　初しも白くおきわたりけり

月前菊　　木村兼子

てる月にきくの色かのまさりつゝ
　　ひかりかゝやく庭のおもかな

秋夜の感　　長谷川はな子

折ふしの移り變るこそ物ことにあはれあれど兼好法師のいひけんやうに、霞棚引く春の空も速く過ぎ、青葉涼しき夏の日も早や果てゝ、今はた荻の下葉の色付きそむる秋の空とはなりにけり、或夜あやしき窓の下に獨り燈火かかげて文讀み居たりしに、さて秋の夜の習ひとて四方は打ちしめりて何となく物淋しく、遠近の砧の響犬の遠吠も亦一きはの哀れさを添へておのづと心も清み渡り學の業も進むべき心地ぞするなる、暫し手にせし書を置きてつくづく思ひ見るに、なべて物には皆其機あり此機を守りて失はざりせば能く其事を成就することを得べしとか古人の云はれつるが、げに宜なるかな、すなはちいくさにも亦此機ありて此機に乘じて戰へば必ず勝を得ると等しく、一とせの間にも亦此機あり、秋は其なべての事をするに最も重ずべき機とす、されば志あるものは皆此時を重じ惜まざる者なし、かくて又思ひつゞくれば、人の一生も亦これと同じからん、年若くて能く物事の苦みに堪ふべき時に當りて、早く其目的を立てゝ能く勉め勵み、如何なる困難に遇ふとも撓むことなくば、遂には其事を經へて身を立て、はた父母の名をも顯すこと難からざるべし、若し此時に當りて勤むることなくば、月日の立たんは矢の如しとか古へ人の言はれつるが如く、忽ち年重りて終には如何ともすることを得ざるに至るべし、其時に及びて悔いんは、さながら寒さはた暑さの時にあひて秋の好時候を求めんが如くにて及ぶべからず、且又古人は往々雪螢の光を集めて物學せしものさへありとか、さるに我等今日かゝるあかみわたれる燈火の下にて安く學ぶことを得る者、如何にもして此秋の日、こと壯年の折にとく／＼勉めいそしまずてやはあるべきなど感じ思へるほどに夜もいと更け行きて虫の音だにたえ／＼にきこゆれば、やがて文机をおたゝめて寢床に入りぬ。

女鑑第百拾九號目錄

明治二十四年六月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證紙郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年十一月四日印刷
同 年十一月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衛
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所(電話番號一九四六) 國光社
(印刷所 東京國光社印刷部)